

平成28年（西暦2016年）9月

## 瞑想録（その15）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみに科学ではありませんし、科学が万能だとも思っていません。科学でない最大のポイントは、あまたの思い付きについて証明を一切拒否していることです。私にとって証明行為は、つまらない時間の垂れ流しに過ぎません。内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。

なおこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

この一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2015. 08. 03

### 1、夢と解釈（その6）

このシリーズは典型的な裸の心象とその推移の仕方を、夢を通じて探るためのものです。

<夢1> 昔に加入したサークルの同窓会があった。会場はなぜかいつも夢に出てくる、霞が関にある鼠色のオフィスビルの7階だ。最初は元部長があいさつした。政治家の街頭演説のように堂々としているので褒めようとしたところ、首がなくてマネキンが服を着ている。次のあいさつに私が指名されたが固辞すると指導役員だった奴があいさつを始めたが、なぜかウルトラマンの仮面をかぶっている。周りを見回すと外人とか子供とか知らない人たちばかりだ。ガチャガチャとひっきりなしに音がする。コップが丸いので勝手に転がり落ちているようだ。私は気色が悪くなって部屋を出た。

<解釈1> 霞が関のいつものビルは、昔に役所に許認可申請に行ったら小役人に嫌がらせをされた時の記憶でしょう。サークルについては「お世話になったが全部が良い思い出ではなく、特にパートナー校の女性の水面下での取り合いに辟易とした」せいでしょう。

＜夢2＞会社が倒産した。債権者たちが駆けつけて金目の物を持ち去っていく。我々従業員たちも給料代わりに、備品を手あたり次第に袋詰めした。ところが若手の社員たちが分捕りもせず、我々オジサン社員たちに「早く帰れ」と促す。どうも若手だけ集まって自棄のストリップショーをやるみたいだ。思わず「オジサンも入れろ、さもないと警察を呼ぶぞ」と叫んだ。早速やってきたのは江戸時代の十手を持った捕物の一団で、「御用、御用」と言うと全員捕縛していった。逮捕は良いけれど、ストリップショーの方はどうなったのだろう。

＜解釈2＞倒産については、たまたまりストラの本を読んでいたためでしょう。ストリップ、やっぱりエッチなものに興味があるのですかね。

＜夢3＞高校生の設定で、クラスで登山バスに乗っている。すると先生が突然私に、「お前は指導を聞かなくてだめだ」と注意をする。私は心外だったので「二重人格の人の指示は聞けません」と答えると、「口答えをするなら紙に書け」と言う。そこでその通りに紙に書いてサインを入れて突き付けやり、態度でフンをしてやった。先生はそれ以上の言葉はなかった。

＜解釈3＞これに類した事件は実際に何回かありました。私は扱いにくい生徒だったことでしょう。

＜夢4＞見たい映画があったので、会社を抜け出して映画館で切符を2枚買った。ところが入ろうとすると、1本はすでに上映中で2本目はそれと時間が重なっているという理由で、どちらにも入れてもらえなかった。文句を言い、受付に戻るとそこにはなぜか以前に失踪した先輩が居て、「映画なんかどうでもよいから酒を飲みに行こう」と言う。そして連れていかれたのは場末の屋台で、酒と焼き鳥をたらふく飲み食いされ、気が付いたら先輩はドロンしていた。

＜解釈4＞私は要領が悪いので、都会っ子の同級生とかに良く出し抜かれていました。

＜夢5＞桂歌丸の宴会に呼ばれたので行ってみた。すると歌丸は細長いきざなたばこを吸っているの、私も真似してみた。そうこうしているうちにウイスキーで宴会が始まり、皆酔いつぶれて寝た。ふと起きてみると実はこれは1週間の強化合宿の4日目だという。特に何を特訓されるわけでもないが、もう雑魚寝につかれてただただ終わるのを待っている。

＜解釈5＞サークル活動は総じて楽しかったですが、合宿の雑魚寝だけはどうしても馴染めませんでした。

＜夢6＞私の論文指導をしてくれた先生がブラっとうちの会社にやってきて、無駄話や世間話に花を咲かせカニ鍋やウニずしをたらふく食って翌朝に帰って行った。業界のドンで分刻みに忙しい人のはずなのに一体どうしたのだろうと、私はいぶかしがっている。

＜解釈6＞あの先生も今はもうろくして、暇な爺さんになっているのかもしれない。

＜夢7＞私は山の方にスカイグライディングに出かけた。骨にビニールを張った半割れ傘のようなものを背中につけて、無動力で空を滑空するのだ。どうやって空まで行くのかは、夢では分からない。ちなみにうまく飛べて気持ち良かった夢は、以前にも見ている。今回は無事にバスで山には着けたものの、便意を催すがトイレが全然空かない、重要な部品がどうしても見つからない、果てには私の宿泊ベッドに別の人が寝ていてけんかをする（日帰りのはずだったんだけど）等のトラブルですったもんだし、この日は結局飛べなかった。

＜解釈7＞空を飛びたい、つまり異次元に行きたい欲求はあるようです。でもできない悔しさですかね。

＜夢8＞突然強盗が出刃包丁を持ってやってきて、「今度のPS（プレイステーション）の開発者の名簿を出せ」と要求してきた。娘が「テープに読み込んだけどぐちゃぐちゃになっている」と言うので、仕方なく私がリールに巻き戻して強盗に渡すと、強盗は喜んで帰って行った。

＜解釈＞今どきリールとかテープとか、何十年前の話でしょう。少なくとも娘が生まれる前です。ちなみに娘はゲーム会社に入社したがついていました。

## 2、神学と数学

ユダヤ神学によると神は初めに天と地を創造した。創世記の冒頭である。ここで神は天地創造の前から超然と存在していたのか、あるいは天地が分かれる前は「更のキャンパス」あるいは「混沌」のような前駆体が存在していたのかと言ったことには、一切触れていない。ただメソポタミア神話のように「善神が混とんと戦ったうえで」と言うことはなく、平和裏に天地の分離が行われたようである。

その後7日の創造が過ぎ、神は土からアダム（人、男）を作りそのあばら骨からイブ（女性）を作った。この時点では人は神の側にいたが、蛇の誘惑に負けて知恵の実を食べたために死ぬべき運命つまり「無限から有限」に転がり落ちた。この描像は神学的には、人はなぜ死ぬかあるいは人はなぜ悪をするかと言う現実と神の無限性を矛盾なくシームレスに合理化する役割を果たしている。

「無限＝神＝絶対善 vs.有限＝人＝絶対悪」と言う明快な対立構図である。ここで有限と無限の間には越えがたい溝があるために、人がバベルの塔と言う「有限の考える限りの組み合わせ」をしても、神と言う無限には至れない。特にユダヤ神学では、「無限こそが基本であって、数や有限はその不完全な零れ落ちと言うか陰に過ぎない」と認識している。これが数や有限を基本とする現代科学に対して、正しくは逆であると指摘している点は注目に値する。

時代が下り人の悪が絶えないのに心を痛めた天なる神は、その一人子のイエスを地上に送った。現在正当とされているキリスト教の理解ではイエスは生まれながらに同時に人でありかつ神である（1人称2人格）、つまり「同時に無限であり有限である」ことになる。これ自体は矛盾に聞こえるがそのイエスについて、①処女降誕と②贖いの死と復活の2つのパラドックスさえ容認すれば「あとはすべてが論理的に無矛盾に導出できる」と公理化したのが使徒パウロである。現在のキリスト教はむしろパウロ教と呼ぶべきである。また矛盾のできる限りの排除は、現代の数理論理学や数学基礎論が目指す方向と全く同一である。

さて、このようにしてユダヤ・キリスト系で誕生し思想化された有限と無限の関係、特に有限はどう頑張ろうが無限になれないという絶対超越性、これはそのまま現在の数学となっている。個々の数字は有限であり、どんな演算を使っても無限には至れず、かといって無限は存在する。そこでそこは実数の発明と極限という言葉と集合論の元と集合の2階建てによって、両者の隔絶が見えなくなるように定式化した。これはほとんど手品やごまかしである。このごまかしにより今の数理科学の壮大な体系があるが、彼らは実体的にキリスト神学者と大して変わらない。

しかしこの手品にどうしても納得できない一群の人々はいた。特に「神であり同時に人である」つまり「無限であり同時に有限である」と言う詭弁に騙されない人々は、グノーシスと呼ばれる一派を作った。彼らはイエスを「人として生まれたが神になった」と理解した。この理解は実は無限と有限の境目の位置をちょっとずらしただけで、無限と有限の超越関係に関する根本的解決には一つもなっていない。それでも正統派と大喧嘩をした挙句に負けて、結局異端の烙印を押された。結果論ではあるが正統派が勝ったおかげで悪魔崇拝のようなトンデモ物は最小限で済んで、社会秩序の面からは無難であったと言える。トンデモ物の芽をあいまい化したからだ。

こうして無難なキリスト教が生き残り、しかも彼らは宗教革命で神秘性すらかなぐり捨てた。そのおかげでキリスト教は「宗教と言うよりお行儀」に成り下がった。成り下がっ

たおかげで守旧が本質のはずの宗教が無宗教の権化である科学技術や数学の進歩の守護神となり、宗教から見ればあだ花の超現世的な科学の守護神になって現在に至っている。時にはガリレオの天動説のような迫害や異端呼ばわりはあったものの、これは例外である。

そしてその科学技術の基本は無神秘性、つまり当たり前である。ではなぜ当たり前が世の中を変えるほどになったかという、それは顕微鏡や電磁計のような種々の拡大鏡のおかげでより微細なあるいはより広大な世界を可視化できたからにすぎない。それでも世界の植民地化を見ればわかるように科学は力による強引な支配制度を確立するには十分な威力で、そのためにキリスト教は実利優先の立場からますます科学技術を奨励して現在がある。火薬をもとに東洋は花火を作り西洋は大砲を作った。

さて元に戻って有限対無限の二項対立は、今の数学や科学技術では当たり前すぎて問う必要がないように見える。だがもし世界創造に先立って混沌があったとかそれ以前からも神が居たといった違った世界創造を深く見つめると、もっと違う科学が見えてくるはずだ。もとになる哲学や規範が異なるからだ。ちなみにイスラムのアッラーは世界の初めより前にいて終わりよりも後にもおり、アッラー自身には始まりも終わりもないと明白に認識されている。始まりも終わりもない数学とは？

ユダヤの神が宇宙を天と地に分けたときには、スパッと切れたというよりも大まかに2分されたということだろう。昼と夜なんか境目が明白でないのだからなおのことそうだろう。こう見ていくと今科学者がやっているような人や物質等の有限世界の細かい態様の解明や切り刻みでは、宇宙の本当の本質は見えてこないように見える。むしろ無限と言う神あるいはアナログ集合を基本とした蓋然論理の方に、よほど本質があるのではないか。脳の研究や霊界の研究は、このアナログの先に位置づけないと本質が見えてこない。

さらに世界にはいろんな宗教がある。メソポタミア神話のように善神マルドゥークが悪神ティアマトと戦いこれを破って宇宙ができたのなら、数の在り方や有限無限の二項対立もありようも変わってくるだろう。ゾロアスター教のように善神マスダと悪神アーリマンの永遠の戦いと言う世界観からは、どんな数学や科学が生まれてくるだろう。さらにマニ教の世界観だったらどうか。また神道や昔はどの民族にもあったアニミズム的汎神論をモデルにすれば、有限無限の二項対立もさらに大きく多様化していくだろう。この時点に至れば、ユダヤ・キリスト系内の異端争いなど小さすぎて笑止千万である。

数理科学や科学技術もすでにあるものをマニアックに掘り続けるのも結構だが、思い



切って根本から見直してみるのはどうだろうか。

### 3、泳げるタイ焼き君

もう40年も前なので知らない人も多いと思うが、「泳げ！タイ焼き君」と言う曲が大ヒットした。当初は子供番組用に作られたが、11週連続レコード売り上げ1位の偉業を達成して、国民的な歌となった。その出だしは、「毎日毎日僕らは鉄板の上で焼かれて嫌になっちゃうよ」だ。

この歌を大人も含めて皆さんが気持ちよく歌っていたが、この歌詞には素朴に疑問がある。タイ焼き屋のおじさんはタイを毎日焼いているだろうが、焼かれるタイ焼きは1回だけで毎日違うタイ焼きなのだ。だから「毎日焼かれて嫌になっちゃう」と言う状況があり得ないのは、幼児にも分かることだ。

もちろん歌や芸術は学問ではないから、現実にはあり得ないことが普通に記述される。例えばドラえもんはプロペラで空を飛び、ドアを開けて時空のどこにでも行ける。こういう物理法則に反しているというのなら、幼児は何とも気づかないだろう。だが毎日焼かれるタイ焼きが違うものであるくらい、幼児でもわかるはずだ。それを幼児はもとより、大人も何の疑問もなく歌っている。こういう時の人の思考回路はどうなっているのだろう。やはり人は感情の生き物であって、理性は二の次と言うことか。

こんなことを考えていて私はこれが制作当時はともかく流行は、「サラリーマンの愚痴の歌だ」ということに気付いた。「こき使われるだけの人生から足を洗ってもう自由になりたいよ、一体あと何年働かないといけないの？」と言う嘆きだなの。この大きな嘆きに比べれば、確かに冒頭の「タイ焼きの矛盾」など取るに足らない小さなことだ。もっともネットを検索すると、「この歌がヒットしたのは結果的にサラリーマンの愚痴を代弁していたからだ」と言う主張は既にある。

「毎日毎日僕らは鉄板の、上で焼かれて嫌になっちゃうよ」＝「毎日判で押したように  
出社退社しこき使われて、俺様はもう限界だぜ」

「ある朝僕は店のおじさんと、喧嘩して海に飛び込んだのさ」＝「ある朝ついに我慢できなくなって、上司を殴って会社を辞めてやったぜ」

「初めて泳いだ海の底、とっても気持ちが良いものだ」＝「飛び出して清々したぜ、意外と簡単なことではないか」

「おなかのあんこは重いけど、海は広いし心も弾む」＝「まあ将来の不安はあるけど、この自由は一度やったら辞められないね」

「桃色サンゴが手を振って、僕の泳ぎを眺めていたよ」＝「かわいい姉ちゃんたちも、何気に俺様に注目しているようだ」  
という訳だ。

こうして歌詞の1番は景気良いのだが、最後の3番でタイ焼き君は漁師に釣られて食べられてしまう。これが「やけっぱちで独立開業したって大抵は借金を抱えて終わりだよな」と言う教訓話だとしたら、ちょっと悲しい。だからだろうか、おじさんたちは1番だけ歌っていた。

ところが最近の成熟日本の社会状況、特に日日新聞をにぎわす倒産や吸収合併の話あるいは派遣社員やブラック企業の話の聞いてみると、こんな歌が共感を呼んだ40年前の高度経済成長期だったころの方が、「いやだいやだ」と言いつつも今よりまだなんぼかましだったと思えてくる。

今だったら「泳げ！タイ焼き君」は、いかにもこうなる。  
毎日毎日僕らは会社で、こき使われて嫌になっちゃうけど、  
ある朝出社してみると、会社は倒産して無くなっていたよ。  
突然無職で放り出され、俺様もうだめでやけっぱちだ、  
路頭に迷って明日もない、世の中広すぎて訳分らない。  
ホームレスのおじさんが手を振って、僕を憐れんで笑っていたよ。

ほとんど「泳げるタイ焼き君」ではなくて「泳げないタイ焼き君」とか「溺死まっしぐらのタイ焼き君」なのだ。こっちの話は始まりが惨めな分だけ、「タイ焼き君は最後には良い漁師に釣られて自分も漁師になりました」ならまあ結構な方だ。だが現実にはおおよそ、こんな程度のラッキーもない。

さてどうしたら良いのだろう。ここは私の原点である素朴な疑問に立ち返って、「毎日焼かれる」と言うありえない状況を正すことから始めてみよう。毎日は焼かれない方法としては、①派遣社員やフリーランスになって働きたいときだけ最低限の稼ぎをする、②いっそのことPHAさんのようにニートになってツイッターで「だれか夕飯おごってください」と募る、逆に③毎日焼かれようが嫌にならない強靱なあるいは鈍感な性格に性格改造しあわよくば出世する、などがある。

この第3の選択、このITとネットとSNSの時代にはもはや古い過ぎ去ったモデルではあるのだが、周りの平均的な人々に聞いてみると、意外と結構まだ支持者が多い。具体的には世の中には「ベーシックインカム」と言う制度がある。一言でいうと「全員に無

条件に同額の生活保護があり、贅沢をしたい人だけ働きなさい」と言う制度なのだが、私が感動するほどに人々はこの制度を評価していない。理由は簡単で、「仕事が無くなった暇つぶしの方法がない、これは会社より地獄だ」と言うのだ。

こういう人には「泳げ！タイ焼き君」は、およそこうなる。  
毎日毎日僕らは会社で、暇を潰せてありがたいな、  
ある時僕は上司と語らって、夜の宴会をセットしたよ。  
初めて行った料亭だけど、つけはもちろん接待費、  
経理を通るか知らないが、ドンチャン騒ぎは辞められない。  
料亭のお姉さんがウインクで、また寄ってねとねだっていたよ。

これはもう「泳がないタイ焼き君」だ。懲りない凡夫は今夜くらい、こういう夢でも見て寝なさい。

#### 4、秋山仁の「数学体験館」に行ってみた

先日理系の雄である東京理科大学の、「秋山仁の数学体験館」に行ってきました。ちなみにこの入場料は無料で学生バイトのアテンダントが付いてくれるので、数学オタクでなくても気軽に入れます。中身も結構濃くて、私は1時間居ましたが半分程度しか見られませんでした。

秋山先生はバンダナにレゲエがトレードマークの異色の数学者で会う前から好き嫌いがあるかもしれませんが、展示は結構おまっとうでした。ちなみに秋山先生の専門は離散幾何やグラフ理論、つまり式の変形や微積分のように抽象的でなくて補助線と円と三角形の初等幾何のすぐ先にあるようなビジュアル系の本当の幾何です。その筋で体験館ではビジュアルに、パズルとかだまし絵感覚で体験することができます。

具体的には多面体とか多角形とか空間充填とかそれらの応用先である結晶構造とか化学構造とかそういった類の「おもちゃ」を、自分で動かしながら能動的に体験するという感じです。特に揃っているのが多面体関係、正多面体はもちろんそれに準じるサッカーボールのように2種類の面が規則正しく並んだ形とか、あるいは結晶構造にヒントを得たちょっとした切り方とつなげで形が全く変わる多面体とかです。

最近の成果では「凸な多面体の展開図を作った時にそれが平面を全面的に充填する」と言う次元の混じった「完全形」、これが全部で23種類であることが証明されたのはわずか5年前と言うことです。つまりこの分野が決してすでに終わった「昭和の遺物」



ではないことも知ることができます。面白いおもちゃはほかにも、輪は四角なのにまっすぐ進む自転車とか、球が転げ落ちるときにメロディを奏でる「楽器」とかがあります。これらも実は数学で重要な定理が絡んでいるので、そんなことが遊びながら知り得ます。

他方で最近はやっているけどまだ出展されていないのかなと思われるのが「動的テッセレーション」、1個か2個の図形単位が空間全部を充填していてしかもそれが動くというものです。それから最近チームラボがやっているような、もっと規則性よりもアートを重視したような超応用数学も見かけませんでした。

つまりこの施設全般について総論的に言えることなのですが、そもそもの存在が規則的で初めから対称性の高い3次元空間や2次元平面内で、そこにさらに「正」が付くような「超対称性」を種として仕込んでおけば、結果として出来上がる「パン」にも何らかの対称性や規則性が出るのは言ってみれば当然であってもし出なかったら返って驚くべきなのでしょう。でもまあそう言ってしまうと数学そのものがそもそも身も蓋も亡くなってしまって、「何らかの規則性が出ることを期待しながらもその具体的な態様を論証していく」のが数学のだいご味というべきです。こういうニッチなところに醍醐味を感じない人は数学に向いていないので、深入りせずに辞めた方が良いでしょう。良くも悪くも無難な現状肯定に徹しているわけです。

例えばテトラパック、牛乳やジュースが入った正四面体ですが（下図）、この会場でも環状に6つ並べてありました。先生が何のためにこう並べたのかはそれ以上説明がなかったのでもわかりませんが、テトラパックの1面は正三角形なのであたかも6つを環状につなげれば空間充填しそうに見えます。実際正三角形は平面を完全充填します。ところがテトラパックの場合はそう調子よくいきません。



まず、側面が正三角形で角度が60度と言うことは、正四面体の2面が形成する面角は60度より大きくなります。これは L 字材をカッターで切るときに、直角に切り下すよりも斜めに切った方で夾角が小さくなることから想像できます。と言うことはテトラパックを面で合わせて6つ環状に並べようとしても、360度を超えてしまって収まらないということです。加えてここであえて譲って環状に並んだとしても、更に正四面体の数を増やそうとするとあたかもリングをスキューにつなげたような形になってしまい結局空間充填できません。

実際に、平面の場合は三角形、四角形、六角形と3種の空間充填正多角形があるのですが、3次元以上になると超立方体1種に限られてしまうことが証明できます。これって証明できちゃう以上仕方ないですけど、いかにもつまらない結果ですよ。ですからこの体験館を未来型にするには、例えば「テトラパックが空間充填できるような曲がった空間を考えてみよう」と言う方向にもっていった方が、よほどスリリングではないでしょうか。

このような例はほかにもあります。冒頭に記したサッカーボールのような準正多面体についてですが、このような球面もどきを(正)六角形のみで覆うことは出来ません。「正六角形だと1つの角は120度になるので3つ合わせると360度で平面にしかならない」、これはその通りなのですが、ガウス・ボンネの定理と言うのがあって、曲率がある曲面の場合は正六角形でも角度が120度にならなくてもよいのです。この性質を使って球面を舟形スキューな六角形のみで覆えないでしょうか。

これが実はダメなのです。位相幾何(トポロジー)にオイラーの種数公式と言うのがあって、球の種数は1、仮に曲がっていても六角形のみで覆いうる形は種数が0と異なるからです。分かりやすく言うと、六角形をいくらつなげても、結局球のように「閉じる」ことができないのです。だからフラレーンも、結合エネルギーとしては不利ですが五角形を持っています。ちなみに球でなくトーラス(ドーナツ)ならば六角形のみで覆えます。これがナノチューブの場合です。

ここで何らかの前提を緩めることによりあるいは空間の特性をいじることにより、六角形で覆いうる球面が作れないかチャレンジしたら未来型になって面白い発見があるかもしれません。こういう展示の方が頭や想像力を使うのでエキサイティングではないでしょうか。さらには幾何ではないですが5次以上の方程式に解析解はありえないことが群論で証明されているところ、それを先の六角形被覆のように可視化してくれれば理解が大いに深まるでしょう。

さらには角の3等分の不可能性をビジュアルにしてみるとか、もっとチームラボ風に織部や志野はなぜ美しいのか数理的に研究してみるとか、まだできていないものや不可能が一応証明されているものをあえてオープンクエスチョンにしてみる。その方が展示をずっと野心的にできる、それが私の最終的な感想でした。

## 5、非競争

ここ数か月に読んだ本を挙げると、美術系及び科学系を除くと下記のようになります。

- ・「今日、ホームレスになった」(2006)
- ・「今日から日雇い労働者になった」(2010)
- ・「嗚呼、花の応援団」(漫画、1980ころ)
- ・「苦役列車」(2012)
- ・「うちの会社ブラック企業ですかね？」(2012)
- ・「蛭子能収、こんなオレでも働けた」(2007)
- ・「ある首切り役人の日記」(1987)
- ・「終わった人」(2015)
- ・「娘になった妻、のぶ代へ」(痴ほう介護、2015)
- ・「リストラに克った」(2000)
- ・「いすみ鉄道公募社長」(2011)
- ・「ニートの歩き方」(2012)
- ・「会社が消えた日 三洋電機10万人のそれから」(2014)
- ・「青木雄二のゼニと世直し」(1998)
- ・「マクドナルド 失敗の本質」(2015)
- ・「成熟ニッポン、もう経済成長はいらない」(2011)
- ・「なぜ大企業が突然つぶれるのか」(2012)
- ・「警備員日記」(2011)
- ・「貧乏人の逆襲！ タダで生きる方法」(2008)
- ・「ナニワ金融道」(漫画、1995ころ)
- ・「いちころにころ？ こちらごみ収集現場」(2003)
- ・「霊園はワンダーランド」(ホームレス、2000)
- ・「実録！ 刑務所の中 ムショ体験」(1999)

まあきれいに、かなり「下流」のやくざな世界が揃っています。嫁様には「下向志向でけしからん、ビルゲイツでも読んで金を稼いで来い」などと叱咤されるのですが、自分としてはことさらに下向志向なわけではありません。昨日今日人生を始めた湊垂れ小僧という訳ではないので、あえてニートなんかするよりも会社で仕事をしているふりで

もした方がなんぼか楽なのかは良く知っています。私がこれらの本を読むそのキーワードは「非競争」です。

世の中特に自由主義で商業主義の社会の基本精神は、「競争は善」「効率は善」「儲けは善」なのです。共産主義の非生産性を鏡にすればそれはマクロな社会システムとしては正しいのでしょう。でも私1人くらい生産とか効率とか勤勉に背を向けた人間が居ても、世界は特に困らないじゃないですか。出世競争などと言う昭和時代の死語に踊らされるバカはかなり少なくなりましたが、こうやって競争から降りてみると多様に面白い世界が広がっています。この楽しさにどうして人々が未だに開眼しないのか、不思議でなりません。

非競争は反競争とは違います。反競争は競争を前提としている点で、まだ不完全で不自由です。正反対という深い関係があるわけです。「競争、それ何ですか?」、この境地が私流の悟りの境地です。ただし個人主義は極めて重要なので、自由は捨てません。いわば完全マイペースというか非競争個人主義、これこそ私が到達した生き方です。一言で言って「参加しない」わけです。

バブルのころはよく投資勧誘の電話がかかってきました。そこでの電話向こうの殺し文句は、「お金欲しいでしょ、税金払いたくないですよね」でした。これに対して私の答えはいつも決まっていて、「お金要りません、税金どんどんとって下さい」でした。すると向こうは「ふざけるな」と言って一発でガチャンと電話を切ります。私は単に正直に答えただけなのですが。

ところで最近日本の経済も成熟して、年功序列も定期昇給もなくなりました。要するにしがらみなしの自由競争社会になったわけです。全員がスポーツ選手や芸能人のように出来高制になったわけですね。従来の終身雇用システムですと休暇と言っても「勤続10年で1週間」とかしみったれていて、自分の趣味に打ち込む自由すらなく私は大反対でした。でもかといって競争のみの成果社会も自由はあるのですが不安定です。この二者択一は実はかなり難しい。良し悪しなのです。

本気の自由競争時代に活躍する人とは、小回りが利いて小利口で年単位で儲けを出せるいわば超俗人です。人格とか熟成とか理想とかそういう人の好い道徳的な要素は、競争社会ではすべて邪魔です。しかも打った手がどう出るかには運も多いに関わってきますから、いわば一億総ギャンブル時代です。真面目一方の人には向いていない、超やくざな社会でもあります。

ところで私は田舎育ちでしたが、田舎と言うところは都会とまるで違ってしがらみと世間体のみで動いている社会です。付き合いや地縁血縁で要らないものをいっぱい買わされて、地域のボス例えば代議士とかにひたすら貢ぐ社会でした。私はこの因習が嫌の一念でいわばひたすら田舎に戻る羽目にならないためだけに、会社の仕事も嫌々ですがまだずっとマシなのでやってきました。この意味で私は極めて個人主義を愛する、例えばアメリカ人が「あれは親のことなので自分には関係ない」と言える自由にいたく感動する人間です。

でもこの手の自由社会と今グローバルになりつつある全員が選手の競争至上社会は、実は同じ事の裏表で一体物でしょう。このジレンマについて最近まで悩まされていました。でも冒頭に掲げた本を読みながらわかってきた境地は、競争でも反競争でもなく非競争（不参加）と言う第三の解があるということです。もし私が無能そうで貧乏なら誰も嫉妬もしないし足も引っ張らない。私にすり寄って何かを頂こうともしないわけです。

「世の中に幸せは1種類だが不幸は人の数だけある」と言うことわざがありますが、これと似ていて「世の中金持ちは1種類だがちょっと悟れば無限個の選択がある」と言うわけです。アングラ万歳！どうせなら冒頭の一連の本に見られるような、面白くて無責任で一見無駄でも自分も納得できる気楽で楽しい人生をしたい。当たり前のことですし今までを振り返ると実はすでにずっと実践してきているのですが、やはり自分にはこの手の存在形態こそが居心地が良いのです。一言で言うならば「だれが本当の勝者か」と言うことです。降りて勝ちを取るわけです。

しかも真の生き方というこんなに重要なことが、学校で教えられていません。学校や大学は、変に学問と客観に偏りすぎではないでしょうか。

## 6、アングラ万歳

先日の記事で私は、ほとんどアングラ系の本ばかり好んで読んでいたことを書いた。ホームレス、日雇い、港湾労働者、定年退職者、萌え、警備員、高円寺の変人、貧乏劇団員、リストラ、ニート、倒産、ごみ収集、街金融、服役囚と言った人々の実体験ドキュメンタリーだ。

嫁様には「下向志向もいい加減にしろ」とどやされている。だが私がこれらの生き方に興味があるのはそこに全員とは言わないが、現体制の既成の常識を意識無意識にぶち壊そうという義憤と意気込みを感じるからだ。新しいエネルギーと文化がリッチ層



から出てくることなどあり得ない。新文化はこれらのアングラ集団や人種のるつぽから生まれてくると確信している。そして私自身も不良社員で自称アングラ、ちょっと古い言い方だが精神的ヒッピーである。

こういった本から得られる新しいエネルギーの予感の詳細についてはいま整理している最中なので次回以降に回すこととし、本日は数理科学方面の擬矛盾についていくつかまとめてみたい。私はまことしやかに証明してそれで終わりとする科学技術全般にも義憤を感じている。あまりにも知恵がなく、かつ自らつまらなくしているように見えるのだ。

### <1、論理矛盾>

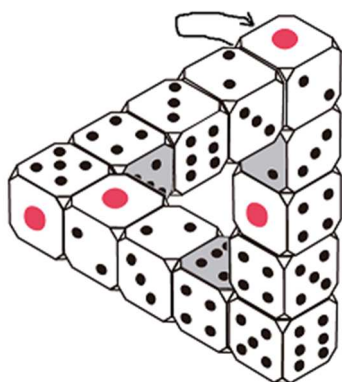
論理矛盾の典型は「私はうそつきだ」とか「これは A であって A でない」式の自己引証型である。数理科学系の研究者は矛盾を何とか解消しようと必死だが、私に言わせればこの方向がそもそも間違っている。ローカルに個々の必要に応じて用意された言葉や論理の組み合わせに矛盾がないなどと夢想する方が、よほど頭が変だ。思うに、キリスト教の組織神学に頭をやられてしまっている。

論理学については以前に、現状この分野は一般論としては三段論法くらいしかない寂しい分野であること、そして論理のほとんどは個別具体的で意味まで踏み込まないと考察の価値がないことを指摘しておいた。本日はそれに加えて、意味まで踏み込むならば世の中の論理は「矛盾か無矛盾か」の2通りしかないということではなくて、多分に矛盾ともそうでないともとれるような表現が連続的に分布していることをはっきりしておきたい。

例えばロシアのプーチン大統領が、「我々は戦争を避けるために攻撃する」と言ったとする。あの人物なら平気でこう言いそうだ。この表明は一見出まかせか矛盾にも見えるし、あるいはまた実は含蓄の深い意味ありげな表明にも見える。この手の表現が実は、現実にはごろごろしている。イギリスで EU 離脱をあおった人物は「イギリスは EU 離脱を経てグローバル化する」と言ったそうだが、これも本気なのか単なるあおりなのかちょっと首をかしげてしまう不思議な言明である。この不思議感が実は、矛盾と無矛盾の境目感なのだ。小泉元首相の「私は平和を祈念しに靖国を参拝する」、これも人により位置づけが難しい。

### <2、サイコロの錯視>

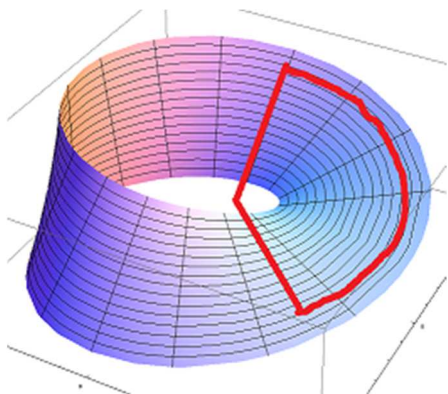
下図のサイコロ積みを見てほしい。何か変だよね。ある意味すぐ上の例で挙げた「平和のために攻撃する」と似たような頭のねじれを感じる。



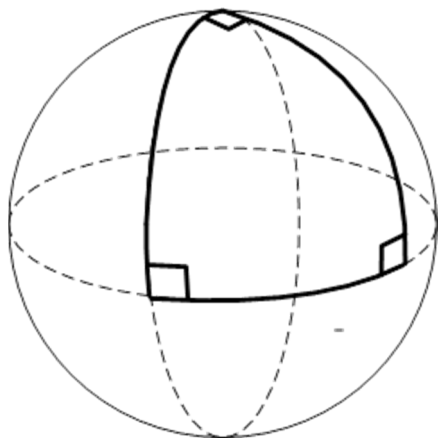
実際このサイコロが作る三角形の右上に向かう腕は残りの2辺よりも後ろ側に行くはずなので、頂点でこう言う方向に繋がるはずがない。だからこれは錯視つまり見間違いでなくて、本当にあり得ないだまし絵なのだ。そしてこの問題が数学なら不可能が証明されてここでお仕舞になる。実際先日紹介した東京理科大学の数学体験館もこの時点、つまり当たり前止まりだった。

だがこんな既成の常識で「はいありがとうございました」で帰るようでは、アングラや新文化は創造できない。冒頭に挙げた一見やくざな、ニートや街金融の足元にも及ばない。つまらなすぎであり、こういう奴らを「製糞機」と呼ぶ。だからここでは先のサイコロ積みが自然に見えてしまうように、我々の慣れ親しんでいる当たり前の空間を改造してしまおう。と言っても3次元空間を曲げて絵にしにくくて頭を使うのだが、ここはサイコロ積みが事実上三角形で2次元なので表現しやすい。

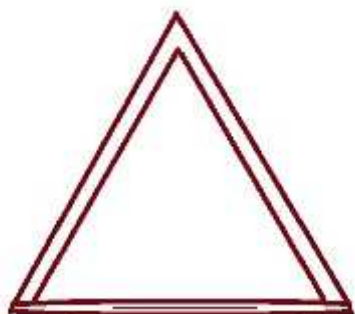
下図を見てほしい、メビウスの帯と言って1回ひねりになった帯だ。だからヘリは1本しかない。この1回ひねりに先のサイコロ積みを図の赤線のように置くと、このサイコロの方が自然で、我々が今まで自然だと思っていた三角形の方が不自然に見えてくるだろう。ここまでしないと幾何学はつまらないではないか。



メビウスから球面に変えると、今度は別の向きに不自然なサイコロ（三角形）も積めるようになる。



適当な絵が拾えなかったので自分で描いたが、三角形の底辺が引き出しの取手のように突き出している三角形が自然に見えることもできるのだ。



### ＜3、正四面体による空間充填＞

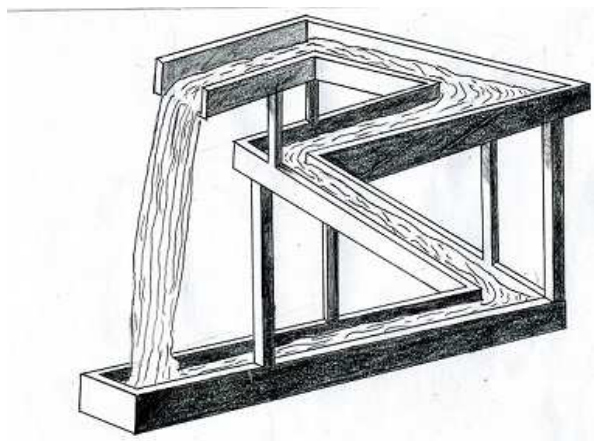
やはり以前触れたように、正三角形で平面を充填することは可能だが正四面体（テトラパック）で空間を充填するのは不可能だ。その第1の理由は、正四面体の面の三角形の角度は60度だが、と言うことは正四面体の2つの面のなす面角はもう少し大きくなることになる。この面角は計算できて、約70度になる（ $\cos \theta = 1/3$ ）。ちょうど72度ならば5個で360度（1周）になるのだが、そこまで調子よくない。

従来の幾何学ならここで終わりだが、それではつまらないのでテトラが集まる線の回りの1周の角度を350度にしてしまおう。これは我々の空間そのものだと不可能なのだが、カスプ（頂点）を作ればつまり円錐のとんがりみたいに空間をゆがめてしまえば

可能だ。すべての点でこれをやるのは不可能だが、テトラの端の離散個の点だけ曲げるならそれは可能だ。空間は段々と曲がってあたかも球に近くなるが、それ以上は閉じない。だが今の幾何学がきれいすぎるのであって、現実の多様さに鑑みればこういう「不揃いな」空間があっても面白いではないか。

#### <4、永久機関>

最期の例はエッシャーの絵にあるような、永遠に流れる水路である。これもエネルギー保存則に反するので我々の世界ではありえないのだが、そこで終わりではつまらない。別の物理が支配する別の宇宙では、こういうことだってあって良いのではないか。あたかもループの針金を永遠に流れる電流のようなものだ。この渦電流は現実には磁場で励起しているのだが、こういう一見の永久機関があった方が面白い。ただしそのような物理の宇宙では、エネルギーとか保存則とかは意味を持たなくなる。



#### 7、エンディングノート

ここ数日に永六輔、大橋巨泉、千代の富士と大物有名人が立て続けに亡くなった。ニュースではどの人についても「長期療養中のところ」とはなかった。だが2年ほど前に亡くなった赤瀬川源平さんの最後もよく読んでみると、長患いはなかったものの終わりの約半年は車いすかベッドの要介護生活だったという。以前の記事でも書いたが、今では1人当たり平均約10年が何らかの要介護期間となっている。介護されて不自由なまま長生きしたくはないものだ。

などという話をなじみの薬局のおばさんと話をしていた。すると「最近では末期医療についての希望をエンディングノートで事前に宣言していくことができ、法的拘束力はないもののそのノートの記載に応じた程度の医療を施すのが主流になりつつある」という。そして最近若い人も結構エンディングノートを書く傾向にあるという。それまでエンディ

ングノートとは遺産の分け方とか遺書のようなものしか書かないのかと思っていたので、さっそくネットでダウンロードして作ってみた。

職歴とか地域活動歴とかどうしてもよい項目はすべて飛ばして、家族は嫁と娘の2人、要介護になったときに介護を受けたい場所は自宅でなく施設、介護者は介護サービス専門者を指定し、特記事項として「施設には個室があるべきこと」を記入した。自分としては一番気楽な選択だ。介護離職の悲惨さは最近問題になっているし、「親の介護のために帰省」などという美名に隠れて現実逃避して逃げ帰るようなダメな娘に育てた覚えはない。介護費用については「借金に頼らない範囲でやめる」と厳命した。「ナニワ金融道」にも詳しいが借金はどんな理由であれ、破滅への一里塚だ。

病気の告知については「余命にかかわらずすべて告知を希望」、延命治療については「一切これをしないが緩和措置のみ行う」を希望した。痛くなくひっそり死ぬるのが最高だからだ。そして特記事項に「安楽死、尊厳死を希望する」とわざわざ書いた。好きで生まれたのではないから、死ぬときの死に方くらい好きにやりたい。

臓器提供の希望については「やらないしもらわない」とした。これには理由がある。臓器提供とか「1人は万人のために」などという聞こえが良いが、これは基督教の仕組んだ奴らの点数稼ぎのプロパガンダで、臓器提供をすることが間接的に基督教の点数稼ぎに使われてしまうからだ。そもそも「1人は万人のために万人は1人のために」は実のところ、基督教の開祖である使徒パウロが言い出してマルクスも使った「働かないものは食うな」と全く同義である。つまり「無駄をする奴は死罪だ」とか「全員全部働け、それが愛だ」ということで、これは私の人生観である「無駄こそ人生だ」を全否定した目先の白痴の合理主義だ。

後見人には家族または専門家及び裁判所を指定した。食事の希望については「晩酌をコップ1杯」のみ特記した。今でも一日のメはこれである。仮に糖尿病になって足を切る羽目になっても、コップ1杯の酒はやめない。施設に持っていきたいものとしては、パソコンとネット環境1式のみ記入した。バカなカラオケに巻き込まれたくないからだ。

財産については、これは手続きが面倒なら放棄したほうが早いような額しかないのですが、どうしてもよいのだが、受取人を妻及び娘とした。特に不幸にして両名とも先立っている場合には市に寄付することとして、まちがっても世話にもなっていない物欲しそうな遠い親戚に渡らないように厳命した。



死後遺体を自宅に引き取ってほしいかについては「無用」を選択、葬式については「やらないでほしい」と明記し、呼びたい友人は現にそうなのだが居ないと記した。戒名はもちろんいらないし、遺骨については「無縁墓等で処分することとし墓に金をかけない」と記した。葬式の費用は一切かけず、また「残したい言葉」の欄は空欄で放置した。

エンディングノートにはほかにも、これから5年10年をどのように何を目標に生きるか等の欄が長々とあった。だがこれらはすべて下らない質問だし、こんな欄を設けてことさらに「終活者をせめて元気づけよう」などというノート製作者のつまらない思いやりが見え見えなので、この部分は切り取って全部捨てた。

以上でエンディングノートを完成してとりあえず妻に渡し、かつノートの存在を娘に知らせておいた。法的拘束力はなくても書いてさえおけば「家族3人がまとめてダンプと正面衝突して全員一度に死ぬ」といった不運がない限り、まあ最大限生かされるだろう。特にもし痴ほうにでもなって家出したときは、絶対に探さないように厳命してある。

よく裁判の判決で無法者に対して「誰でもが我慢して生きています、あなただけではありません」という諭しの文句があり、全くその通りだと思う。私も30年以上も週5日目覚ましで起きては会社に強制連行されてきたし、歯が抜ければ多少不便でも人工の義歯で補うしかない。これは嫌でも逃れられない定めだ。でもまあ最後くらいは、少しくらい願いが聞かれてもよいと思う。とりあえずノートのおかげで、植物人間になった時点については一安心した。あとは「要介護3位で10年以上生き続ける」といった生（なま）生かしの境遇にならないことと、だれか悪いやつにはめられて借金生活にならないことを心から祈るのみである。

## 8、下って行った極限

絵を描く時を考えてみよう。たいていの場合まず全体構想を練り、画面割りや構成要素の大まかなところを考え、色調やタッチを決めたうえで、骨から詳細へと描きこんでいき、まあ十分と思ったところで止めて、それで1作品とする。別に彫刻でも作曲でも著述でも、さらには科学技術の発見の時すら実はほぼ同様だ。

初めにはまっさらな画用紙があり、そこをシーンごとに大分けするところから始めるこの始め方は以前に「数学と神学」の記事手指摘したように、旧約聖書や多くの民族で語り継がれる天地創造の物語と基本的に同一である。大きいところから作っていった、次第に細部に至るのである。この順序を「逆にしろ」と言われても無理だが、ある程度

の順番の前後例えば滝の細部と岩の細部のどちらを先に描きこむかの自由度はある。

例えば山水画。山、滝、岩、木々等を整合よく配置し、まず輪郭と位置指定をしたうえで、山は山らしく雄大に、岩は岩らしくごつごつと描いていく。岩のごつごつ感を出すには最初に大きな凸凹を太く描き、その合間に小さな凸凹を細くあるいは薄く描いていく。そして全体として十分に細密になっており、かつ伝えたいモチーフが十分に描かれていると感じたところで完成である。特に山水画など、描きすぎずにいかに間をとるかが重要になってくる。

今記したように現実的には「満足したところで完成」なのだが理論上はどんなに細かくも、極限的には無限個に細かくもできる。ある程度以上描けばそれ以上細密にしても伝えるモチーフの本質に影響を与えるものではないのでそこで止めるだけだ。今までに述べた手順はいわば「上からの無限」、つまり大を分割して小を描いていくという手順である。その個々のストロークは「それが繰り返しの単位になる」というような規則性があるものではないので厳密には「数」とは言えない。だがまあある程度の順序を持った「数もどき」が、無限個無順序無差別に並んでいるイメージになる。

それに対して従来の数の無限は、0, 1, 2, 3...と進んでいったところの極限である。デジタルの無限は先に述べたアナログの無限に対して、①下からの積み上げである、②全部に順序がつけられる、③順に等間隔である、という意味で異なっている。だが手順上のいわば理想として、極限としての無限が想定できるという意味では同じである。

それでは先に述べたアナログの「上からの無限」と従来の数学の「下からの無限」の、2つの無限は結局一致するのであろうか。ここで集合論では、数の $n$ に対して「 $2^n$ 」は1対1対応がつけられない、つまり無限の濃度が違うことが示されている。これに基づく下からの無限では「最高の濃度の無限」は存在しえないことになるが、現在の素朴な無限観ではこのような技術的なことは議論せずに、あくまでも整数の行き着くところの無限を考えている。

絵の例に即していうならば、下からの無限とは画面をピクセルに切ってそのピクセルの数を限りなく上げていったイメージである。これと細々部の無限まで描き切った枯山水とは、無限として同じであって上からか下からかの方向は逆であっても至る所は同じであろうか、それともなお越えがたい段差や違いがあるのでしょうか。

まず神学の類推で見ると「上からの無限」とはいわば、「神は雑草の1本1本まで全て知っていて司っている」イメージである。それと厳密な数という観点からは残念であるというかむしろ絵が多彩なことの裏返しであるが、無限に至るのにアナログにはデジタルのような整った数や演算関係は見えない。強いてあるのは「より上層か下層か」という相対順序と、「こう描けばそれらしく見える」という蓋然法則のみである。この意味では上からの無限と下からの無限は厳密に鏡対象ではない。

だが従来は下からのデジタルな無限しか認識されていなかったところ実は上からの無限という大掴みに対称な世界が存在する。しかも後者のほうがよっぽど日々日常に即してその意味では一般的であり、従来の整数によるあるいはピクセルによる下から無限はむしろ特殊なものにすぎない。この雄大な気付きは、非常に重要に思える。

その上でそもそもの問いである、上からの無限と下からの無限は同一か段差があるか。これは見方によりどちらもあり得るように思う。上からの無限で主張したいのは個々の部品ではなく全体のモチーフであり、波動である。そして見る側は作者とほぼ同じ順序で、そのモチーフつまり波動を感知できる。上からの無限の本質は波動である。そして感動の伝播は共鳴現象である。

それに対し下からのデジタル無限はモチーフとか波動といった要素は全くない。その意味で下からの無限は上からの無限よりも劣るといえる。この波動の面白いところは、上からの無限はそもそも各部分が下界のデジタルから見ればいちいち無限であるにもかかわらず、その「無限の無現先の極限」を考えているところにある。この辺に波動の神秘を解くカギがありそうだ。

特に従来の物理において粒子に比べ波動はまだ十分に理解されていないことに鑑みると、むしろ上からの波動を、もちろん下からのデジタル波動つまり正弦波に助けられながら、見つめなおすことは重要であろう。特に波動といった時には、無限の特質を極限としてではなく現実として既に包含している点に注目すべきポイントがある。

現在のところ瞑想はここまでのところだ。

## 9、「ナニワ金融道」の一コマ

世の中と金融の裏を知り尽くした青木雄二氏の代表作であるナニワ金融道、もう20年近く前の作品ですが人生や世の中の教科書として、文部省検定教科書とか大学の

専門の実験演習などよりもよほどためになります。このようなやくざな世界とは一生かわりたくはないですが、もしも絡まれた時の自己防衛として必読本です。教訓は山ほどあるのですが、その1つのあらすじを以下にまとめます。

（あらすじ始め）

地上げ屋の肉欲企画が駅近くの区画をほぼ地上げしたがどうしても立ち退かない個人が何軒もあり、獲得した土地が虫食い状態のままバブルが崩壊する。肉欲企画は苦肉の策として虫食いのままその上に安ビルを建て、それに風俗業者を入居させて当面の借金を弁済しようとする。ちなみに虫食い変形ビルなので3億円程度の価値しかない。

肉欲の資金源は赤貝銀行の手先のアカ信ファイナンスで、バブルの時に10億円も貸し付けて土地とビルの第一抵当権を有しているが、バブルがはじけてもう回収は絶望的になっている。肉欲企画は不渡り回避のために5千万円がさらに必要になるがアカ信にはもうそんな余裕はないので断られ、主人公の灰原が所属する街金融の帝国金融に泣きつく。そこで帝国金融は一計を案じて、ビルについて代物弁済権と部屋の賃借権を取った上で5千万円を肉欲に貸与する。

肉欲ビルの風俗営業に反対運動があることを知った灰原は裏に回り、立ち退かない地主の一部屋に形だけの病院を作って登記した。風俗営業法を利用して、近隣に風俗営業ができないようにしたわけだ。肉欲と既にテナント契約をした風俗業者たちは登記に行ったところ病院を理由に断られて肉欲企画に契約不履行をせめて弁償を迫り、肉欲の社長は夜逃げして不渡りを出す。そしてビルは賃借権で灰原の帝国金融が抑える。賃借権は実際に住むことにより抵当権に対抗できる。

肉欲に逃げられて収まらない風俗業者たちはビルに乗り込んで、住み込んでいる灰原を締め上げて「ビルは業者たちの所有である」という旨の念書を書かせようとする。だが灰原はボコボコにされながらもこれを拒否し、業者たちは帝国金融の本社に乗り込む。ところが灰原が先回りして業者たちと肉欲企画との賃貸解除契約を抑えておいたために、帝国金融はそれを盾に業者たちの主張の無効を指摘し、それでも暴力的に取ろうとする業者たちに警察をちらつかせて追い返す。

その後顧問弁護士の助言によりビルの滌除（てきじょ：抵当権の合法的買い取り）を通告し、対抗手段が打てないアカ信はほとんど倒産状態で手を引く。そして帝国金融はわずか1億円で、肉欲のビルをまんまと入手して自社ビルとする。業者たちが灰原を痛めつけているときに暴力団も呼んだのだが、ちょうどその少し前に成立した暴力

団新法により手が出せない。暴力団もさなければ灰原の家族をいたぶるやり方でむしりとったものを、みすみす黙殺する羽目になる。

なお滌除の立法の目的は抵当付の物件を買ってしまった購買者を保護するためであり、帝国金融の場合は状況が違うのだがでも条文通りで、依然として合法になってしまう。また肉欲企画は札幌だけでいわば地道に地上げをしていた「良心的な」地上げ屋であり、これが暴力団筋なら盗んだダンプを突っ込ませて家をぶち壊し無理やり取り上げていたところだった。

（あらすじは以上）

この一連のやり取りで感心するのは、やり方に多少の無理があるとは言えすれすれ合法の範囲ではなくまんまとビルを乗っ取っていることです。その法テクというか論理順序は極めて整然としていて、論理学を学びたいのならお決まりの教科書を読むよりもこの漫画を読んだ方がよっぽど論理の本質と皮一枚のすり抜けを理解できます。この漫画を読んでいると、自分が学生時代にまるで他人事みたいな専門科目に身が入らなかった理由が見えてきました。そしてこの論理推移の迫力がすごい。以前に「心象伝達で最も普遍的なのは絵画だ」といいましたが、絵画の欠点は論理を表現できないことでその点では小説やマンガに軍配が上がるのが良く分かります。

灰原と帝国金融が肉欲企画に一方で融資しながら他方で営業妨害するのは厳密にはずるいのかもしれませんが、それを言い出すのならそもそも肉欲企画の地上げが反社会的行為です。彼らが地上げ屋としてはましな方だったとしても、それは免罪符にはなりません。それに世の中の悪い奴があなたをはめようとすれば、このくらい平気で仕組んできます。株や先物はやらなければ無関係でリスクはありませんが、不運な言いがかりは生きている以上誰でもあり得るので普段から用心と注意が必要です。

それとこの漫画全体に言えることですが、帝国金融は街金融なのでかなりえげつないですが、その基本のところは金融でない普通の零細業者、例えばフランチャイズのコンビニとか駅前の不動産屋等と共通しています。法律をまじめに守っていたらとても立ち行かないので、見えないところのズルや違法行為は日常茶飯事で、常にせこく回りを伺い社員個人の信用すら勝手に利用します。マンガでも借地権は帝国金融でなく灰原個人の名義で打たせています。

ちょっと考えてもみてください。中小企業や零細企業の社長や社員と言ったら、多少売れてきたラーメン屋チェーンのオヤジと住み込みの調理見習いとか、その辺の板金



屋の社長と打ち抜き工みたいなイメージでしょう。こういう社長さんたちが社員の労働時間をまともに守り厚生年金や退職準備金を積み上げていると思えますか。最近太陽光発電でヘタを打ったところが多いようですが、実はこれだっていつの間にか社員の名義が保証人に使われているかもしれません。

それと風俗業者のやり方ですが、帝国金融に実は騙されたとはいえ怒りの先は肉欲企画であるのが筋です。でも世の人々、頭にくるとそんな理性では済みません。とにかく取れるところから、脅して取ってやれという態度になります。これも我々が陥るかもしれない事案であり、たとえ潔癖であっても心すべきところです。「やった・やらない」の水掛け論にしたり、どうしてもよいところに因縁をつけたりして噛みついてきます。この部分の教訓は文書化が基本だし、逆に文書化するともう逃れられないということです。帝国金融の方はそれこそプロ、予想して先手を打って余裕で立ち回っています。

なお、帝国金融はかなり阿漕（あこぎ）に見えますが、それでもなお貸金業法に則って届け出をした正式な金融業です。でも世の中には闇金融と呼ばれる無登録の、もっと阿漕な連中がいるので注意してください。まあ全体としていえることは、天使は馬鹿でも務まるが悪魔は知恵がないと務まらなくて、その悪魔に対抗するにはそれ以上の注意と知恵が必要だということです。

## 10、非常識・非日常

先日「非競争」と題した記事で、最近私が読んでいる本として、ホームレス、日雇労働、リストラ、倒産、ブラック企業、警備員日記、ナニワ金融道、高円寺の変人物等を挙げた。

そしてことさらにこれらの「下流物」を読んでいる理由として、今はもはや昭和の亡霊でしかない「競争社会」からの脱却を理由に挙げた。そして続く「アングラ万歳」という記事で、アングラこそが新時代を切り開く宝庫である点を指摘した。これらの点はさらに煮詰めると、常識破壊、日常破壊に至る。私は常識とか日常が大嫌いだ。科学者にならなかったのも今の科学技術が「常識科学」であるからだ。

それではこれらの本から日常破壊について、どのようなヒントや教訓を自分は得たのか。概してこれらの「下流」業界の人々には、普通の人が持っている何かが足りないから下流に居る。そして人は普通、足りなければそれを得ようと頭を使う。もちろん貪欲な現代に満ち足りた人などほとんどいないのだが、それにしてもこれらの人々の欠乏は程度が違う。そこに異次元の知恵の出現の可能性がある。

欠乏を補う一番手っ取り早い手段は、盗む、たかる、恵んでもらうの3つだ。だがこれらは頭をあまり使わない。厳密にはどんなことも極めれようとするれば道があるから、盗み道とかたかり道といった分野も存在するのであろうが、あまり感動しない。他方でナニワ金融道のような犯罪すれすれのきわどいものも、アイデアとしては感心するものの私のような要領のない人間がまねをしても、単にやけどをするだけだ。ワルの道にはワル独特の才能が要る。

住がネックならいっそのこと、家をねだらなければ済むことだろう。そういうわけで私が一番期待したのは、ホームレス業界だった。世の中「衣食住」といって、これだけはどんな人にも最低限必要なものでしかもただでない。まあこのうち衣食については、ずいぶんと安くなったし剰余が入手しやすい。ありがたいことだ。だが住についてはこれが如何ともしがたい。持ち家は一生ものだし、借家でも人のものの割に変に高い。そもそも単なる物置兼寝室が、なぜあれほど高いのだろう。

衣食がただとまではいわないものの近年かなり安くまた拾いやすくなった主な理由は、海外から安いのを手軽に輸入できるようになったからだろう。それに流通小売りの簡素化もある。ところが住だけは輸入できない。厳密にはできるのだが、それはスウェーデンハウスのような逆に高級志向の家だ。加えて日本は土地が高い。だから住だけは必須なのに高止まりしている。

もっとも以上の理由を吟味すれば、家が高い根っこの理由は利便の良いところにそれなりの家で住みたいからであって、その意味では住が高いのは利便を買っているからだということになる。つまりどうしようもない山奥の古びた炭焼き小屋でもよければ、住も安くなるのだ。この方式を実践している人はそれなりに居て、たまにテレビで紹介される。

だがこの手の生活も、実践しようとするときほど手軽でない。情報入手とか心の準備とかが必要で、基本的に若い人にしか向いていない。そこで40過ぎのリストラされたオヤジということになると、やっぱりすったもんだした挙句に近所の駅地下や霊園でホームレスに流れるということになる。これらの人々も最初からホームレスというよりは、「警備員とか日雇とかいろいろ応募していちいち落ちて結局やめて」という経由の人が多い。

ちなみに今例に挙げた警備員とか日雇、採用されても1日で首になる人も居れば、「師匠」「先生」「神業師」などと呼ばれる人もいる。人種のるつぼも非競争の特徴だ。

いろんな人種や人生と知り合える面白さもあるし、先生レベルになると悟りすら感じさせる。

さて本題のホームレスだが、彼らには持病があって働けないかわいそうな人もいるのだが、たいていは打ちのめされて人生のやる気全体をなくしてしまっている。つまり単なるホームレスというよりマナーレスあるいはやる気レス、究極には「生きる気力レス」なのだ。そしてそこにはそこなりの悲喜劇や仁義やコツや友情もあるのだが基本的なモチベーションが惰性なので、これまでの世の中の常識や日常をガラッと変える新提案のヒントがあったかといえば、まだ見えていない。

ホームレスの最大の試練はもちろん気温の寒暖や寝場所だと思われがちだが、意外なことに実は暇つぶし方のほうが問題らしい。時間は有り余るほどあって、これが意外と地獄だという。ニート代表のPHAさんも同じことを言っていた。つまり働く時間は山ほどあるのだがそれ以上にかつたるくて働く気力がわからないのだ。これは一種の精神病の初期かもしれないが、私も気持ちはわかる。

つまり世の中の労働者の多くが、実は暇つぶしも兼ねて働いているのだ。この事実は私には驚きだった。世の中から仕事をなくしたら、私はこの大多数の人々から袋叩きになりそうだが私にはこれに答える妙案がある。それほどに暇が怖い人は、お金を払って仕事をさせてもらえば良いのだ。仕事をする人が金を払う、このアイデアには我ながら感動した。こういう社会が来れば誰も不満はないではないか。

なんのことはない、結局自分が一番非常識ですでに非常識を実践していたのか。でもまあ良いではないか、彼らの生きざまをきっかけに更にアイデアをひねる練習ができたのだから。まだほかにもいろいろアイデアが出そうだから、それについてはおいおい書いていきます。

## 11、お言葉の斬新性

去る8月7日に天皇陛下が、「お言葉」としてお気持ちを国民に披露された。それを拝聴した国民のはしくれとしてお言葉の語句の一つ一つの重みに感じ入るとともに、陛下が日々国民のこと特に未来の在り方を祈り考えてきたその志の高さにご提案の斬新性に驚きと感動を覚えるものである。

ここからは、学のない私個人の感想になる失礼をお許し頂きたい。

まず陛下はお言葉で直接にはいわゆる退位あるいは譲位について、あくまでもそのお気持ちを語られた。だがこれを譲位のみに係るものと捉えるならば陛下の大御心を理解していないことになる、私にはそう思えた。つまりもっと一般に、天皇家が今後も永く日本国民の精神的な支柱でありたいという強いお気持ちの中で、いわば象徴的に退位について語られたものと感じた。

まず陛下はお言葉の初めに、「象徴としての在り方」を模索してきたと語られた。天皇は政治不介入だから口が裂けても「元首」などとは言えない事情はあるにしても、もし象徴という言葉が気に入っていないのならば単に「天皇としての立場」と言えば済んだものだ。ことさらに「象徴」に全部で8回も言及しておられる。ここで象徴とはいわば、「精神の柱とか国民の心のよりどころ」といった高度に精神的な意味であろう。天皇陛下は未来志向の立場から引き続き象徴の立場を望んでおられると見た。

これは間もなく2700年にいたろうとする皇統の歴史において、いろいろな局面にいろいろな天皇の在り方はあったものの、その究極の役割を言葉に集約するならば「象徴」が一番近いと陛下自身が祈りを通して結論に至ったということだ。そしてできれば自分のみならず今後の天皇も含めてこのままの象徴という立場が、日本と世界の未来のために一番適切であると感じておられる。憲法改正自民党案では象徴は「元首」となっているが、陛下御自身はどうもこれに賛成しておられない。

陛下はいわゆる退位のご理由として、①加齢とともに象徴の勤めに滞りが生じる可能性と、②大喪や殯（もがり）等の伝統行事に伴う膨大な手間や国の停滞の弊害の、2つを上げておられる。ここで大喪等の行事に言及したのも象徴的である。象徴天皇が個々具体的な事跡をまとめて、やはり象徴で示しておられるのだ。大喪の例で陛下が伝えたかったことは、「たとえ2千年以上続いた伝統であっても時代に合わないものは改廃していきましょう、大切なのは国民の各時代に合った精神的支柱となることですよ」ということではないか。だとすればこれは、ともすれば自称右翼の論客がよく語る単純な過去帰り、昔帰り、過ぎ去った事への復古趣味にくぎを刺していることにもなる。

この観点に立つならば、退位の象徴的意味も見えてくるだろう。退位もいわば象徴的な例であって、大喪とは逆に「今までになかったことであっても、象徴天皇の役割に必要なことは加えていきましょう」という、極めて前向きのご提案なのである。ここでもネットウヨ等の安っぽい昔帰りや安易な改憲、内観外憂はあるにしても「その対処の仕方が昔のような偏った精神主義や間違った武士道ではだめですよ」とたしなめておられるのだ。

さて、その陛下が目指している「明日の天皇像」とはどのようなものだろう。推測するにそれは、たとえ次の天皇は形式的には皇位継承順位に沿ったものであっても、単純な順位だけではなく引き続き国民に「ぜひ天皇になってください、私たちの心の故郷になってください」と逆に望まれるような天皇に、今も今後もなっていきたいしそうなるべきだというお考えである。世界が民主主義の時代になってきた現状にかんがみて、これ以上の民主主義があるだろうか。

数合わせの民主主義なら今までもあったが、これが本当の民主主義である。その意味で今回のお言葉は、世界にその真意が広まるべきであるほど大きな価値をもつものだ。祈る務めを「国民との信頼と敬愛でなしてきた」と述べておられる。そして普段は好々爺であるような陛下が日本や世界の平和と一人一人の幸せのためにここまで考えておられたことには、一国民としてただただ驚愕し敬愛するしかない。

摂政という具体的な内容に踏み込んでいるのは、全体の象徴的表現からは多少意外であった。しかしこれも、今後の「日本人のための天皇」の理想を生かすのが本日のお言葉の目的である故に、「ゆめゆめ小手先でごまかすなよ」という臣民やその代表に対するくぎ差しである。「平和と幸せの象徴としての天皇」を精神として、目先の安楽に走ることなくきっちりと位置付けなさい、「そうすることが今後の末永い国民の幸せです」と親切に念を押しておられるのだ。つまりこの「意を誠実に体する」ことも、陛下が我々のすべてに要望される重要な心構えだと象徴的に諭しておられる。

まとめれば天皇陛下は祈りの結果、①自主的退位と②大喪の礼省略の2つの事跡の実践によって今後の日本の未来志向精神を日本の国に定着させることが今の自分の最大の義務であるとして、それを実践してからこの世を去ろうとしておられるわけである。そしてたしかにこの開明さこそが、日本が栄え世界に平和が訪れる唯一の道である。

付け加えるならばこのお言葉から1週間後の終戦の日には、「先の大戦への深い反省」にも言及しておられた。これはたとえ手間がかかろうとも全ての事件を平和裏に解決していためには、安易に軍事力に頼るべきでないことへの為政者はじめ国民全体への戒めである。「反省」などというと「反省するなら金をよこせ」などと言い出しそうな隣国があることも承知の上で、あえて戒めたものである。

今回のお言葉（勅語）は今後の世界の歴史に残るであろう。そしてその個々具体策は、我々臣民に任されている。我々がお言葉のその精神を立派に展開して実践できるかあるいはごまかしで流産させてしまうか、これからが我々の正念場である。



## 12、ノーハウ

先日の「無限」に関する記事で、無限には下から積み上げる無限（デジタル無限）と上から降ろしていく無限（アナログ無限）の対照的な2種類があることを論じました。現実で語るならば数字や論理や言葉は積み上げる無限、それに対して上から割ってできていく無限の典型は経験とノーハウです。

ノーハウとは言葉にできないような、現実や現物に即した実践的なコツとか勘のことです。この習得には実地訓練と個人の勘の良さで、到達度や習熟速度がかなり違ってきます。ゴルフの打ち方や車の運転や水泳の仕方も最初は理屈で習いますが、所詮は師匠について実地で獲得しないとものになりません。

もう5年以上も前になりますが三洋電機がリストラののちに消滅したときに「辞めさせる者リスト」は当然あって、この対象は成績の悪いものと半導体分野全員でした。そして他方で「絶対に残す者リスト」もあって、これが当時は液晶とリチウム電池の核心的技術者だったそうです。

このうち半導体はかつて花形の職種でした。最先端の量子力学が現実的に作動していて学問的にも高く、かつその進歩は世の中のありようを変えたほどでした。しかし他の分野に先んじて中韓台等に追い付かれ、結局売り負けました。部門まとめて社内失業化し政府主導でエルピーダとルネサスに統合されましたが、今はそのいずれも整理もしくはたたき売りされています。量子力学の理論通りでノーハウがあまり要らないことと大規模投資が不要な短小軽薄分野であったことが、「勉強さえすればすぐに追いつける」という皮肉な結果をもたらしたわけです。

他方で液晶とリチウム電池、いずれも基礎的な理論はあるものの、液晶については鮮やかな三原色を出すための色々な液晶の配合加減が、また車載リチウム電池については多数あるセルを安全かつ効率的に協奏させる手加減が最終的には製品の優劣を決定しました（「会社が消えた日」より）。いずれも理論の及ばない職人的ノーハウ的な技術です。

つまり会社や競争企業が奪い合ったのは深い学識者ではなく「具合」とでも呼ぶべきノーハウを心得た技能者たちでした。ノーハウを得るには場数と試行錯誤が必要で手間ヒマがかかるために中韓台の追従が手間取り、日本の割高商品が売れ続けたわ

けです。つまり国際競争で見る限り貴重なのは勉強や秀才でなく、泥臭い「手先具合」とそのまとめ役となるような親分肌でした。

結局デジタルな部分はすぐに追いつかれ、勝負はアナログな部分で展開されたわけです。まあそういう意味では先端技術も関取も大工もホームレスも勝てる技術とか会社に残れる人の種類は、学卒か否かに全く無関係に棟梁肌で集団をまとめる人間力を有するか否かということだということになります。

ところでいわゆる知的障害の人々に社会参加してもらうために彼らによくやってもらう仕事に、植栽の手入れ、パン焼き、クリーニングの整理があります。これらはいずれも簡単な手作業なので彼らにも可能なわけですが、もう一つ別の理由があって機械では今の最先端の精密技術や人工知能を使っても彼らに及ばないのです。つまり植栽も衣類の整理も、デジタル近似もできないほどに超アナログなわけです。

ということはどういうことでしょうか。この厳しい時代に三顧の礼をもって迎えられるような有能技術者と知的障害の人々と、かれらの能力の活かし方はいずれも超アナログということで実は同一種類だということでしょうか。もしそうだとしたら微積分等の高等数学や論理脳を学校や大学で鍛えることに、実は意味がないのではないのでしょうか。いわゆる学力選別も、人種差別ほどに無意味なのではないでしょうか。

私はかつて会社で東大等の一流大学卒の人々と席を並べ、彼らを観察して分かったことがあります。もちろん彼らのものの知り方や理解力は高いのですが、彼らの場合それ以上に「無駄なことは一切やらないし覚えなない」という態度が徹底しているのです。例えばそういう上司に会議の報告をしても、中身についてはまず聞かれません。「どの程度の地位にある誰が話したか」だけです。彼らは学生時代に微積分ももちろん解けましたが、入社したその日に不要になって全部忘れたそうです。彼らはそもそも、昨日何をしたかも覚えていません。

まあこういう人たちは楽をして給料をもらってめでたく退職すれば良いので、今更微積分もやらない代わりに泥臭いノーハウの第一人者になってまで会社に残ろうなどというクソ根性はありません。でも社内の人間関係の論理順序については何十手先まで読んでいます。いずれブーメランのように自分に返ってきそうな仕事だけはチョイナチョイナで片づけて、あとは新聞でも読んで時間をつぶしています。

ではなぜデジタルはこういう「優秀な」人にしかできなくて、より習得に手間ヒマがかかり需要も多いアナログは結構誰にもできてしまうのでしょうか。それはアナログに規則性

がないために、対応は常に個別具体的だからです。つまりアナログな仕事に個別具体的に処理する能力は必要でも、事物を抽象化論理化する能力は不要だからです。

「トラっばい影を見たらまず逃げて、のちにそれが本当にトラか確認する」、このアナログ手順であらゆる生物は生き残ってきました。つまりアナログは自己保存本能に直結し、他方でデジタルは直結しないのです。数字や数学とは言葉をさらに抽象化した、極めて特殊な代物なので理解できる人は少ない。でも特殊な能力に頼らないと生存できない生物は、すぐに絶滅してしまいます。

それで結局大学の論理脳教育は本当に必要なのでしょうか。まあ専門奴隷になるには必要なツールでしょう。また人を束ねるにも第一には人間的魅力ですが、それに次いで部下のそれぞれが実は何を欲しがっていてそれぞれの手柄の大きさに対応してどんな褒美を与えたら良いかを平等に思いつくにも、論理脳はそれなりに生きそうです。ただ「秀才＝貴重」、これは大学がうっかり植えつけそうな危険な誤解で、企業や現場は必ずしも重視していません。現に日本の就活面接では、「どれだけ学んだか」でなく「どれだけ遊んだか」の方が問われます。

### 13、テトリス

テトリスというゲームがある。上からT字型やL字型のブロックを落としていき、一列全部が埋まったらその列は消える。そうやって列を次々と消していくが、消し方が下手で上蓋まで埋まってしまうとゲームオーバーというルールである。

このゲームを考案したのは今から30年ほど前に当時まだソ連だった時のロシア人だ。日本はもとより世界中で大流行して、「共産圏が自由主義諸国を愚民化するための陰謀の道具ではないか」などと言われたほどだ。それにしてもなぜこのゲームがそれほどに流行ったのだろうか。

ゲーム自体は空間充填を目標としていて極めて数学的で幾何学の練習問題ではないかと思わせるほどなのだが、もし勉強や宿題だったら流行るはずがない。またゲームは対戦するものでも点数を稼ぐものでもなく、また自分が下手で終わってしまわない限りエンドレスで「上がり」とか「勝ち負け」といった概念もない。およそ流行る要素がないのだ。

ゲームで落下するブロックは正方形を4つつなげたもので、全部で7種類ある。これが勝手な方向から落ちてくるものを必要に応じて回転させながら、うまく空間充填させる

のだ。ゲーム自体は私でも考案できるほど至って安直なのだが、驚異的なのはこんなルールのゲームがはやると見抜いたその慧眼である。

このゲームの10年位前には東欧の数学者が考案したルービックキューブが流行って、これは数学的には群論なのだがそれにしても速さを争うとか手順を争うといった競争の要素があった。しかしテトリスの方は暇つぶし以外にまあ多少のスリルはあるかもしれないが、およそ何もない。強いて言えばうまくはまったときの、「やった！」という小さな成功体験だろうか。それにしても10回も重ねれば飽きるように思う。進化も擬人化も仮想キャラもないが、今でも手や品を変えつつ流行っている。

結局このゲームの爆発的流行を見て感じるのは、人はその能力によらず実は幾何とか形を見ることが本能的に好きなのだという事だ。学校の幾何学の問題が変にねじけているので一般に人々は幾何が嫌いだと思われがちだが、実は素朴には形が好きなのだ。

例えば山の形とか花の形と滝の形を人が好きなのは、絵画や特に山水画に対する熱狂的愛好から分かる。ただテトリスでの形は、正方形とかL型とか人工的である。まあ人工的であっても人々がそれなりに美を発見するのは、ビルやインターチェンジの対称形や幾何学図形への関心から推測できる。将来はこういった人工物が入った山水画も、あるいは登場するのかもしれない。

それに広い意味での形とか空間認識といえば、車の運転もバスケットボールのパスも相撲の決まり手も、みな何らかの形で空間を意味づけているからできることなのだ。そういった空間意味づけの優しすぎも難しすぎもしない一種として、テトリスは流行ったのかもしれない。ドミノやトランプ並べだってルールに基づいた形合わせだから、ある意味幾何である。ユーフォーキャッチャー(クレーンゲーム)だって、極めて高い空間認識が必要だ。

さらに戻って、では人はなぜ空間の認識や意味づけが好きなのか。これはたぶん空間の意味を認識することが生物としての生存や危機回避とかエサの獲得とかに直結していて、その意味で本能に根差しているからだと思われる。つまりテトリスでスパッとハマった瞬間は、いわばまんまと敵を出し抜いたあるいはうまくお餌にありつけた勝利感に近いのだ。

ではこれほどにテトリスが人の本能に近いならば、変な位置の角度を求めるようなひねこびた問題を解くことはやめて、テトリスを学科に取り入れた方が良いのではない

か。そういう面はあるだろうが、テトリスでは直観は養えても論理脳は養えない。今の学問は基本的に、「論理脳を鍛えてあげましょう、直観はクラブ等で各自やってください」との立場だ。勝手に超然としている。

それにテトリスが人の成長にとって有益だというのなら、碁や将棋やチェスの方がもっと先に学科指定されていたことだろう。これらは現状のところ、極めて優れた脳トレであり競技あるいは道ではあるが学問ではない。学問はあくまでも論理であることを必要とする手続きなのだ。テトリスはもちろん直観力を楽しく養成するが、つまり有意義であるがしかし学問ではない。そして学問に、面白いことは要件にない。

論理脳は特に自己主張や自己弁護に重要だが、排他的に格段に重要かということそんな気もしない。直観や審美眼や世渡りの常識も、負けず劣らず重要だ。現在大学進学率が高いのは別に為になるからではなく、多分に一時代前のお茶やお花と同じで釣書に一行書けるための格好付けだ。従って世の中の常識が変われば、大学進学熱も冷めていくだろう。

だからテトリスの楽しいところをもっと生かそうとするのなら、まず学問を利用するのはあきらめる。そして場合によっては多少規則を変えてもよいから、チェスや将棋のように同好会や大会物にするということだろう。「世界テトリス選手権」とかだ。もう既にあるのかもしれない。

なおテトリスも今はいろいろバリエーションができていて、勝負したり点数をつけたりするパターンもできている。将来的には「ペンタリス」とか「キュービリス」といった、従来の延長上にないバリエーションも発生しうるかもしれない。あるいは穴埋めステルス機能など面白いかもしれない。一種の横やりというか敗者復活戦だ。個人的には、既存の「平面」とか「上から下へ」といった空間概念そのものをぶち破るようなものを期待したい。

#### 14、心象4景

脳内における心象形成の典型例を、本日は4例紹介します。

##### (1)クジラの味

最近久しぶりにクジラ肉を食べる機会があった。そのときは「ふーん、こんな味か」という感想で、自分としては分かったものの他の既存の意識との比較やつながりは特になく、その心象の位置はあたかも脳空間の孤立点であるかのようにだった。



これはクジラの味を直ちに解明しないと命が危ないというような状況でなかったこともあるだろう。そしてそのうちに「この味を他人にどう説明するのだ」という気になって初めて、「魚よりも牛や豚に近い」とか「野性味があってジビエ風だ」とか「どうしても食べたいほど飛び切りにうまいわけでもない」といった概念的位置づけが、おもむろに芽生えてきた。

そこでクジラ肉を食べたことのない人にクジラ肉の味を言葉で説明する方法だが、言葉のもどかしさからさらに間接的になって、「哺乳類だから魚の味じゃなくて、強いて言えば牛肉に豚肉をちょっと混ぜてそれをジビエ風にワイルド感を出した味かな」程度になってしまう。要するに未知の物の脳内位置は既知の心象が形成する平面上にはないしまた未知のものだけにそれ特有の単語にも乏しいから、結局脳波で直接に伝わらない限り残念だけどこの程度しかできない。

そしてこれがまだクジラの味だから店を探して食べてもらえば良いのだけれど、「金メダルを取った時の気持ち」とか「車に轢かれた時の気持ち」とかそういうのはそれ以上に経験のしてもらいようがない。

## （2）さも偉そうに

私がまだ中学生だったころの話です。音楽の教科書に荒城の月とか文部省唱歌のような古い歌に加えて、「春の唄」という歌が掲載されていた。「ラララ赤い花束車に積んで…」と言う歌で、ほかの歌よりは最近なものの親の世代の歌である。これを見た特に女子生徒たちが、「なんだ、この教科書を作ったジジイ、こんなしょうもない歌を載せてさも今の若者の気持ちが分かっているかの態度をとりやがって。偉そうな恰好をするなら郷ひろみでも載せてみろ」などと、かんかんになって怒っていた。

この話をふと思い出して平成生まれの娘に話したところ、「その気持ちはよく分かる」と言う。この怒り心頭はかなり微妙な心の作用だと思うのだが、時代が全然違ってしかも当事者でない娘にも伝わるとは。結構この手の感情的な好き嫌いは、世代を問わずに人類共通なのだと感心した。

## （3）意味の推移の気づき

英語の“ever”を“ever young”つまり「未来永劫いつまでも」の意味で覚えた生徒が今度には“ever seen”と出てきたときに、直ちに「過去以来ずっと」の意味であると柔軟に合点できる生徒と、「未来に見た」って意味が変だなあとしか進まない生徒の2種類がいる。

例えば”light”が「光」でもあれば「軽い」でもあるのは偶然だろうが、今の”ever”の場合は「本質がずっとという感じなのだ」ということが分かれば同じ意味のちょっとした流用であるとすぐに気づけるはずだ。そしてこういう応用センスのない人にはあえて、「これからずっと」と「これまでずっと」の2つの別の意味があるのだよと教えるしかない。この辺が頭の良し悪しの、実は分かれ道なのだ。

似たような例で”about”は「～について」「～の近くに」「約」の一見3つの意味があるが、センスのある人はこれらがいずれも「近くに関連して」という1つの感じの同じ派生だと自ら合点できる。こういう柔軟な応用力を測る物差しがあれば地頭の客観計測ができるのに、残念だ。

もっともこういう言語のセンスがない人が他方でバスケットボールのシュートでは抜群のセンスを見せるということはあるので、実は地頭と言ってもその意味は見てくれほど単純ではない。

#### （4）取り仕切り

以前に会社の仕事で若い人を連れて某研究所の研究発表会に行ったときに、その研究員が質疑応答の際に自分の成果に都合の良い方にばかり話を持っていくので、私が思わず「この人はことが仕切れない人だなあ」とつぶやくと、隣席に居た若い人がこれを聞いて「いやこの人は研究者とは思えないほどことが仕切れる人ですよ」という。

この若い人は営業畑の人だったが、営業の常識からすると自分の売り物が売れるように話を強引に作ってしまう人こそが、優秀な人であり仕切れる人なのだ。そして普通の研究者は損にも得にもならないことをぼそぼそつぶやいている子供みたいな人が多いという。この「取り仕切る」のわずか一語の意味を例にとっても、人の性格と経験により意味づけや脳空間における位置は大きく違ってくるのだ。

### 15、意識の階層

先日「2つの無限」で、無限には数字のように下から積み上げていくデジタル無限と、逆に上から分解していくアナログ無限がありうることを記した。先日の記事ではアナログ無限に至る例は山水画で、真っ白な紙(0)に山や滝や岩の輪郭を取ることから初めて、徐々に細部を描きこんでいくさまを例にした。

この例でもわかるようにアナログ無限に至る道はデジタル無限のように全順序でもなければ等間隔でもなく、したがって加減乗除のような演算もない。あるのは意識の階層構造である。太い線が大きなレジームを主張することもあれば、ちょっとした端のデザインが味わいを出すこともある。要するに個別具体的で、一般法則は見つかりにくい世界なのだ。

このように前回の「上からの無限」は絵画の場合、より正確には絵画が形成する心象のありようを例にしたものであった。だが人のすべての意識や心象の起こりようも実は同様である。生まれたばかりの赤ん坊は先の山水画の例の白紙のごとくにほとんど本能しかなくてできることと言ったら泣くことくらいだが、それでも経験により「泣けばミルクをもらえる」ことを学習していく。

そのうちにハイハイを覚え歩くことを覚え箸と茶碗の使い方を覚え猫のかわいがり方を覚えと、見様見真似と全感覚の総合によりどんどん深くかつ細かく覚えていく。そして青年になるころにはゴマの擦り方とか異性にすり寄るコツとか、小遣いをちゃっかりせしめるコツとか意趣返しのコツとかまで覚えていく。

この覚えるステップごとに、「そうかこうやればよいのか」という感じの「ツボにはまる」あるいは「スパッと入る」体験をしたことだろう。それはあたかも野球選手がかつ飛ばしたときに一瞬球が止まって見えるとか、球が落ちる前から「今回はホームランだ」と確信して自分に感動するのと同じ種類の成功感であり達成感である。

人は行為をするごとに感想を持ち、それが次回以降の肥やしになる。うまいとかまずいとか、下手とか上手とか、きれいとかブスとか、痛いとか気持ち良いとかだ。そしてスパッとハマるのは最高の感覚だ。ちょっとずれてもこの感覚はない。ちょうど定番の駅弁何度食べても飽きないが、少し違えばもう駄目だろうという「当たり方」のようなものだ。

こういった山ほどのプロセスの中で、我々は毎日判で押したように朝起きて歯を磨いて顔を洗い朝飯を食べて服を着替え会社に向かう。そしてもうこういう大人の時点になると、もはや日常ルーチンについて「意識の階層」など気にしない。会社で新しい指示が来たときは従来の経験に基づいて処理し、時にその分野で新しい経験や知見を得る。これは先の心象階層でいけばそれまでの心象よりもっと無限に近づいた詳細な心象形成にあたるのだが、もはやそんな意識もことさらに持たなくなる。

ところでこのあくまでも個別具体的で法則や繰り返しのないはずの脳空間において、今までに何度も言及したが人はしばしば「蓋然法則」を見出だす。先の「赤ん坊のミルク」も、結構もらえるが必ずもらえるわけではないので人生の初期からすでに蓋然なのだ。大人の蓋然としては例えば「人の年と人生を知りたかったら手を見ろ」とか「人の質を見たかったら服でなく靴を見ろ」といった多くの経験則がある。

以上に見たようなスパッとハマる成功感や蓋然法則の見いだしは、厳密には法則がなく個別多様な心象無限空間において何らかのマクロの同質性を人は知恵で見いだせることを意味している。このマクロの同質性に気付くのはもちろん人の知恵でその大元は自己保存の本能であるが、それらの法則の対象は心象空間でどのような形態で分布しているのであろうか。

人の能力の本質は似ているものを一まとめにする「モチーフの発見」であり、それから派生した応用力である。例えば食べ物が欲しい時も泣いてみようとか、ホームランを出すコツをゴルフのホールインワンに当てはめてみようといったことだ。これらの対象はそれぞれが脳空間の別の互いに無関係な位置にありながら、何らかの共通点が存在していることを意味する。

その共通点の存在とはおそらく意識の階層すなわち心象を形成する「数字もどき」の蓋然順序やレジームの広さやポケットの広さの中に、偶然か必然かは別にして何やら「似た構造」があるということだ。これは決してデジタル数字のようにミクロで厳密な合同や相似ではないが、マクロな相同性いわば崖の形の類似とか会話のニュアンスの類似みたいなものがあるということだ。そしてこの類似感覚に基づいて、人はしばしば他人にあだ名をつける。

だとしたらデジタルとアナログの「逆向き相同性」の観点からは、アナログにはデジタルのようなミクロで厳密な合同は見いだせないものの、より気づきに知恵の要るマクロな類似性や蓋然法則があるということになる。そしておそらくそのマクロ気づきの典型例が、漫画の「ナニワ金融道」に見られるようなある意味えげつないお金の稼ぎ方、あるいはもっと身近に言えば株や先物投資の勘ではないか。こちらのマクロな世界を正とすればデジタル世界の厳密な四則演算はゆがんで見えるが、ミクロの数学者的立場に立てばマクロの金の儲け方は卑劣に見える。これは相対的な問題で、実際はどちらが絶対的に正しいとか立派だということはない。

法則がないはずの山水画だって「こう描けば岩らしく見える」といった蓋然的なコツや手順があるように、数字の典型である金だって「こうした方がより安全に回収できる」

といった蓋然法則は当然にある。あとはその人がその性向に気づけるほどセンスが良いか否かということなのだ。

## 16、ワルイコトイケナイ

雨が降ろうが槍が降ろうが  
暑かろうが寒かろうが  
ただひたすら満員電車に乗って  
会社に行って上司に仕へーへーし  
いつも卑しくにやにやしている。  
1日に米4合と味噌汁と少しの肉を食べ  
あらゆることを自分の損得で判断して  
関係ないことはすべて忘れ  
一生かかってやっと買えた  
ウサギ小屋にありがたく住む。  
東に宝くじがあれば数枚買って全部はずれ  
西にただ酒があればたらふく頂き  
南に死にそうな人がいても心が微動すらせず  
北に喧嘩があっても関わらないようにする。  
お天道様からもらったわずかな分け前で満足し  
仕事もしないが悪いこともせず  
他人に迷惑をかけないで静かに死んでゆく。  
所詮そういうことしか人はできない。

この宮沢健治のパロディー詩のように、人に許されているのはお天道様から分けてもらったほんのわずかのエネルギーを消費し相応のごみを出して、あとは静かにこの世を去っていくことです。一人当たりの分け前は生まれや信条や頭の良さや働きに関係なくほぼ一定で、その意味では限りなく平等で民主的です。

ただその一定量、ポイントをどう使うかについてある程度の裁量があります。衣食住は欠かせないとして、一定の裁量の範囲でお墓を買おうがデズニーランドに行こうがグルメをしようがパチンコで擦ろうが、全く自由です。ただし希望の全部は叶いませんし総量は天井があるので、例えばこの世で贅沢をしたい人はお墓をあきらめなければなりません。



人々は「自分の力で事物や商品や成果を製造した」のかと思いがちですが、実際に人がしたことは太陽や地球からもらった光エネルギーや鉱石をちょっと加工したり捕獲したりしているにすぎません。だから「人の手柄」というのは限りなく零なので、分け前も平等なわけです。

同じ理由で仕事をしなくてもそんなに悪くないのですが、絶対に良くないのは犯罪をやらすことです。手鏡で覗いたり酔ったふりをして抱き着いたりとかそういうことをして新聞沙汰になり、「予定のコース」を踏み外してはいけません。予定外の行動は集団全体に擾乱を与えて無意味にエネルギーを垂れ流します。高畑裕太が好例です。余計な行為で回りの仕事を無意味に増やし、自分も没落しました。そんなことで有名になるより、大過なく勤め上げてめでたく定年退職してください。

人々はよく「何か面白いことないかなあ」とか「毎日同じでつまらないなあ」などとぼやきますが、社会システムが強固に出来上がっているからこそ毎日安心に同じことができるわけです。同じことができるのが当たり前だと思えば、バチが当たりますよ。それとも1週間働いた金をどさっとデズニールランドにつぎ込んでちょっと目先の変化の代償に無意味に奴らに金を恵むのが、果たして利口なことでしょうか。

最近地味婚ブーム等があってコンスタントに収益が出なくなった結婚式場や高級ホテルが、その代わりに収奪のネタとして「豪華七五三」を考案しこれが結構流行っているそうです。富裕層を当て込んで子供をカモにした阿漕なビジネスで、式の間の子供がお色直しをするところなど発想は結婚式とほとんど変わりません。会社が社員に期待している新規ビジネスアイデアとはこの程度のことで、ヒットした考案者は栄達していることでしょう。あなたはこういうおバカな栄達のカモになりたいですか。

まあ今の世の中は全員が雇われ人で西郷隆盛のような偉人や豪傑なんて出るわけがないですから、みな等しく小市民です。でも小市民でもいけないということは何もありません。普通にやって小市民になるとむちゃくちゃ頑張って惜しいところでとちってやっぱり小市民になっちゃうのと、どっちがマシでしょうね。それに戦争とか革命とか非常事態になると人々は全員戦闘員か難民で、小市民すらできません。小市民は実にありがたい身分です。

「サラリーマン根性」という言葉があります。東海林さだおさんの漫画の「アサッテ君」とか「サラリーマン専科」とかに描かれている世界で、非常に小心者でみみっちい。でも大勢の人が痛くもかゆくもなく生きていくためには、皆がこのコースを歩む以外に解がないのです。ストーリーを一つ紹介しましょう。

主人公のアサッテ君はある日、分不相応にも上司にバーに連れていってもらいました。そして小心ながらそのマダムに、何か格好良いところを見せて気を引きたいと思うに至ります。その時ある客が、「火事だ」と叫びました。アサッテ君はとっさに椅子で窓をぶち割って逃げ道を作り、マダムを抱き抱えて避難し助けようとしてしました。ところが客が叫んだのは「火事だ」ではなく「梶だ」で、梶という友人に久しぶりに会っただけだったのです。アサッテ君は当然マダムにどやされ、なけなしの小遣いから弁償させられ恥をかきます。

この姿ってサラリーマンに共通の蓋然法則ですよ。でもまあこの程度の波風で、人生を終わってください。

## 17、ナニワのマルキスト

20年ほど前にマンガの「ナニワ金融道」でブレイクしたのが青木雄二さんだ。この手の業界漫画には「ミナミの帝王」とか「闇金ウシジマくん」とかもあったが青木さんの練れた漫画構成と人情では断トツで、今でも資本主義社会をたくましく生きるための本音の教科書として絶大な人気を誇っている。この人ほど、資本主義の裏側や本質を抉り出した人はいないだろう。

ところが青木さんは、自他ともに認める徹底した唯物論者である。観念論や恣意論を徹底的に排して、事実と現物と現金だけしか信じなかった。若いころ底辺の仕事は何十も転々とし、その結果夢とか愛とか希望とかは全て虚像だと身に染みたようだ。さもあるう。

そしてその底辺での豊富なサブカル経験をもとに、「ナニワ金融道」を描いたわけだ、だが唯物論と言えはマルクス主義、マルクス主義と言えは共産党や革マル等の学生運動で、彼らの目標は資本家の打倒と労働者の解放である。だから本来はなくなる運命にある資本主義のリアルな姿など、青木さんにとっては知る必要がないもののはずだ。

そのマルクス主義の青木さんが、資本主義や商業主義の裏の裏まで知り尽くしかつ教示している。しかもその描き方は単純に「資本主義は間違っている」というような教条的なものではなく、逆に「このように歩め」と人々を励ましているかのようだ。そもそも青木さんのように底辺で辛酸をなめた人は、普通は共産党に入党する。この齟齬は一体どういうことだろう。

思うに共産党や学生運動は、「マルクスに倣え」「マルクスを目指せ」が基本的姿勢であった。最近は誤解が多いが、マルクスは間違っていない。労働者の勝利とか言っていることは法則通りなのだが、そのみでユートピアが訪れると思い込んだ片手落ちの超楽観主義者だった。要するに人が良すぎて悪を知らな過ぎたのだ。だから共産主義は何か人の本性にちぐはぐで、絵空事の裸の王様を演じている。結局いまだに人々の賛同を得ていない。

このマルクスに近づこうというのが今の共産主義なら、青木さんの場合はもっと原点に返って「マルクス主義の根本である唯物論で現状の世の中を徹底的に解剖してみよう」と考えたのだ。結果的にマルクスよりもよっぽど現実的であり、言ってみれば「マルクスを超えた唯物論を極めよう」としたのである。マルクスを目指すとマルクスを超える、実は一字違いで大違いなのだ。

仏教にも大乘仏教と長老派仏教（小乗仏教）の大きく2派がある。中国朝鮮日本は大乘仏教、それに対してスリランカやインドシナ諸国は長老派仏教である。この2派の大きな違いを一言でいうと、長老派は原始仏教時代の長老たちが唱えたことから想像できるように、開祖のブッダに少しでも近づくことを目標にした。それに対してブッダの入滅よりかなり経って興った大乘仏教はブッダの原点に返って、いわばブッダをも超えた悟りを得ようとしたものである。

このせいで明治維新の頃には「大乘仏教非仏教論」が沸き起こり当時はかなり混乱した。まあ狭い意味での仏教つまり小乗（小さな乗り物）の立場からは大慈悲を唱える大乘（大きな乗り物）が飛びすぎていて、仏教には見えなかったことだろう。ちなみに大乘仏教では、「ブッダに会ったらブッダを切れ」と教えている。

共産主義と青木さんの関係は思うに、この小乗と大乘の関係に当たるのではないか。だから共産主義は浮世離れしていて、青木さんは現実をしっかりと見ているのだ。ここで面白いことは仏教でも唯物論でも、ちょっとした原点の取り方でその主張がまるで正反対にもなりうることで、これは宗教一般に言えることである。例えばグノーシスはこの世を徹底的に仮の世とみなしたが、だから好きなだけ放蕩をしまえという一派とあの世に行くために精一杯精進しようという一派という、真逆の反応が生まれている。

今のキリスト教でも、「我々は世の全員が救われるまで伝道をやめないから大乘キリスト教だ」と主張する人が居る。先ずこんなシンクレティックな例えを言って追放処分

にならないのか、他人事ながらひやひやものだ。なるほど大乘の大慈悲とは悪人正機であって、全員の悟りを目標にしてはいる。だがキリスト教のように「自分の論理と寸分でも違うものは全員異端であってゲヘナの火に焼かれる」などという傲慢で唯我独尊なものが、大乘であるわけがない。完全に小乗である。

そもそも「聖書の学習」などと言っているうちはだめだ。本気でイエスさんを見習いたいなら、千石イエスのように身を挺して困っている人々を守るべきである。また聖典解釈の裏をかいて怪物を山ほど描いてなおかつ火あぶりにならなかったヒエロニムス・ボスのようなしたたかな聖画家もいるが、こういう柔軟さの方がむしろキリスト教の新境地あるいは大乘に通じうる。

さてその大乘共産主義の青木雄二さん、まあ品は今一かもしれないが宗教の開祖として一番大事な素養である人間観察力と世上観察力ではピカイチである。彼がなろうと思えばあるいは開祖になれたのかもしれないが、そこは恣意や観念を徹底的に排することが懲りるほど体に染みついているので、やはり「大乘唯物論者の面目躍如」というのが彼の正当評価になるだろう。

## 18、高畑裕太容疑者

典型的な二世俳優の高畑裕太が強姦致傷容疑で現行犯逮捕された。現在拘留中だが間もなく書類送検されるだろう。おそらく二世に批判的だった民主党(当時)政権がまるでダメで沈没したためか、最近また政治と芸能の業界を中心に二世流行りとなった。「いつかだれかこけるのでは」と思っていたら、政治家の小渕優子はまだ序の口で、高畑淳子のところが大こけした。

当ブログは芸能ブログでもゴシップブログでもないので、この事態は静観していた。ところが先日オーストラリア人で自らの強姦被害者であるキャサリン・ジェーン・フィッシャーという人が、自らの体験をもとにこの事件についてコメントしていた。そして彼女の受け取り方が我々一般日本人とかなり異なっていたので、この究極的犯罪を例に比較文化の観点から日欧の文化や意識の違いを見てみたい。

彼女の記事のアドレスは下記である:

<http://bylines.news.yahoo.co.jp/ogawatamaka/20160829-00061632/>

彼女の主要論点をまとめると、

- 1、強姦は人格支配欲もしくは人格破壊欲の実行である、
- 2、成人した息子に母親は無関係で同情を誘う会見は開くべきでない、

3、歯ブラシの写真を集める運動を始めて世界に呼び掛けた、  
の3点である。いずれも我々と感覚が微妙に違っているが、世界標準の立場に立てば我々の受け止め方がガラパゴスであって、正しいのは彼女の感性ということになる。

まず強姦の動機、これは動物の雄と同じで単純に「種をばらまく衝動あるいは本能の遂行」であろう。ことさらに人格がどうのといった、形而上の抽象的な問題ではない。もちろん本能にも社会生活には不適切あるいは制限すべきものもあるので、本能だからやってもよいなどということにはおよそならないが、現象は正しくとらえないと再犯防止は空振りではないか。

実は「強姦の目的は人格破壊」論は、すでに何度も聞いたことがある。この視点は欧米の特に女性の間では、常識あるいは共通原因の思索経路なのであろう。だが人といえども進化した生物であり、人格破壊論には人のみ特別視するキリスト教のバイアスを感じられる。「女の人には分からないの、男が」というハワイの歌があるが、単なる蛮行を変に理性化して被害者が事件を正当化しているという不思議な過ちを感じる。

次に会見不要論である。二十歳を過ぎた子供の累が親にまで及ばない、この主張は正しい。特にもし高畑母が無名の一般人で裕太容疑者が親と無関係に自力で今の俳優という地位を勝ち取ったのなら、それも一理あるだろう。だが息子は明らかに親の七光りで、才能も怪しいのに安楽に俳優になっている。母親がまるで事務所のマネージャーのように息子を紹介して歩き、親子共演などと話題づくりもしていた。また息子を猫かわいがりして苦労知らずに育てたことが、今回の犯罪の重要原因であることも明らかだ。

確かに狙ったとまでは言わなくても母親の謝罪会見には息子への叱責の呼びかけはなく、息子への同情を買うような効果があった。そしてそういう一種の隠蔽効果を、かつての被害者が憤慨する気持ちもわかる。仮に今後の裁判で改悛の情が情状酌量されたりしたら、このかつての被害者は頭にきて日本の法制度すら疑うに至るだろう。母親の変に冷静で理詰めの受け答えにも、疑念を感じたかもしれない。だがこれまでの経緯を考慮すると、「もう大人だから母は無関係なので謝罪しません」とは法律上はそうであっても感情的には、それが日本でなくても難しかったのではないか。

最後に歯ブラシの写真集め、私にはこれが一番の違和感であった。歯ブラシは裕太容疑者が被害の女性従業員を呼ぶときに「歯ブラシを持ってきて」を口実にしたことに注目して、いわば事件の象徴として運動に採用したものだ。だがこんな写真を世界中から集めて、自己満足以外に一体何の意味があるのだろう。「賛同者が〇万人いたし、



その一人一人に振り返りの機会を与えた」とかなんとか理屈は百万たっても用意されているのだろうが、なにか事態の重篤性に反してまるでお遊び感覚であり、一種のちゃかしにすら見えてくる。

一般に欧米人はこの手の「象徴的告発」イベントが大好きだ。平和の鳩飛ばしとか折り紙の鶴を折るだけの平和運動などはその典型例だし、「人間の鎖」と言って人が手をつなぎあって何キロも長くなったとかそういうことに欧米人は感動するのだが、私にはまったく理解できない。2年ほど前にチャリティと称して「氷水かぶり」が流行ったが、あれほど下らない。自己満足の塊でかつキリスト教の偽善のにおいもする。

今までの世界の転換点、例えば先の大戦の勃発とか日本の明治維新とかがこのような上辺のお遊びのような油断の塊で一度でも決まっただろうか。はっきり言ってこの手のアピールのぶち上げと周知によるバカ騒ぎは、むしろ事件を忘れたい被害者に失礼だ。まあお飾りでしかない国際連合はよくアリバイ的に、こういう活動をやるが。

最後に裕太容疑者の今後を見ておこう。今は容疑者だが、続いて被告、そして服役囚となり、やがて刑期を終えて出所する。もちろん二度と華やかな表舞台には出られないが、ヤーさんの舎弟になるような裏街道しか選択肢がないかというところでもなさそう。自分の人気のための身勝手な保身で愛人を殺してしまった歌手の克美しげな顔も、表舞台には出なかったがカラオケ教室を開いて結構盛り支店までできたほどで、最後は寿命で床の上で死んでいる。まあこういう道だろう。

裕太容疑者についてもう一つ感じる特徴は、「年上好き」である。本人はまだ22歳だが被害者は40歳代、それ以外にも30代半ばの橋本まなみにも言い寄っていたそう。思うに裕太は美人の母親が女性としても最高だったのではないかとすれば橋本も被害者も、いわば禁断の母親の代理だったことになる。一種のエディプスコンプレックスである。

## 19、アナログ無限

今までの議論で、①神話はどの民族でも何らかの天地創生から始まり後に人の誕生と増殖が起こるパターンであること、そして②これが大雑把に天を象徴するアナログ無限と天から零れ落ちたデジタルな滴である人の誕生に対応していることを記した。

この「神＝アナログ＝そもそも無限＝善 vs. 人＝デジタル＝そもそも有限＝悪」という構図は、ユダヤ・キリスト系においてより明確な二分法になっている。他方インド神話

や日本神話では、神が人と結婚したり人を生んだりしていて単純でない。ではキリスト教でも、墮天使である悪魔は無限と有限のどちらの側になるのか。一般に一神教よりも多神教の方がより実相なのであろう。

先の議論では引き続いて絵画制作特に単色の山水画を例に取った。すなわち①真っ白なキャンパスを②まず構成割りして③輪郭の部分から初めて④最初は主要部を太く⑤徐々に細部を細く仕上げていく順序がまさにアナログの零から無限に至るありようであり、個々の筆のストロークがアナログの「数字もどき」であるとした。

さらに引き続く議論では、人の心象形成や脳内空間も基本的に今見た「アナログ数字もどき」になっているとした。そしてその特質は数字もどきが一定順序でもなければ等間隔でもない、つまり「数字」とは言いながらもその実態は個別具体的であって演算が存在しそうな点を挙げた。それにもかかわらず人の防衛本能の本質は「類似を同一視してモチーフを見抜く」ことであって、ここにマクロの法則が蓋然的に生まれ得ることを論じた。

さて多神教的な面の瞑想は別途にして、本日は単純な一神教的描像を引き続き見たい。具体的にはさらに進んで、アナログ世界の表現になっているであろうもう2つの例を取り上げる。その1つは細胞分裂であり、他の1つは有機合成化学である。

細胞分裂の最初つまり零は、無精の単細胞から始まる。この時点では細胞は「真っ白」で、どんな細胞にも分化しうるポテンシャルを有している。これが有精化して細胞分裂を始め、細胞の数が増すとともにその役割が分化していく。眼の細胞は比較的早くで続いて神経系や脳の元も形成され、骨格や内臓や手足も分化したところで誕生して赤ん坊になり、さらに成長して大人になる。

このプロセスは絵画と同様で、単純なものから複雑なものへ、単機能なものから多機能なものへの分化である。この分化は一生続くもののその主要部分は青年期にほぼ終わっている。つまり青年期ですでにアナログ無限に近い状態にある。また「個体発生は系統発生を繰り返す」の観点からは、人以前の段階で「絵画が仕上がった」として制作をやめるのが下等動物の存在だということになる。山中先生のIPS細胞や小保方さんのSTAP細胞は、分裂細胞をあえて原点の真っ白に返そうという技術である。

第二の例である有機合成化学では、始まりは炭素原子である。炭素1個ではまだ有機物質ではない。そして炭素の合成の方向は大きく2通りある。1つはダイヤモンドと

かアモルファス炭素とかナノチューブとかフラーレンになる系統である。これは普通有機化学とは言わないし、これをいくら進めても人体や生物体の一部にはならない。

本日の有機合成の系統から大事なものはベンゼン(亀の子)である。これがエネルギー的に極めて安定であるために、零ではないものの1(単位)であるような特別の役割を演じる。先ほどから述べているアナログ数字もどきの、「等間隔でもなければ同等に重要でもない」という性質を端的に示すのがベンゼン環である。大多数の有機合成物は、ベンゼン環をたくさん抱えた形になっている。ちなみに人類はこれだけ科学が進んでも、ベンゼン環は有機合成でなく石油のクラッキングで得ている。

ベンゼンにメタン基が付けばトルエン、2つ付けばキシレン、ヒドロキシル基が付けば安息香酸、2個付けば蟻酸、水酸基が付けばフェノール、環が2つつながればナフタリン、3つ並べばアントラセン、1つが窒素に置き換えればピリミジン等々と発展していく。それぞれ名前がついていることからこれら1つ1つを数字もどきと見て良いが、これらに順序や間隔を定めるのはもはや不可能である。

だから有機物質はもはや、数字や積み上げに相当するIUPAC命名法ではとても間に合わない。個別の慣用名と立体構造式で表現する。生体高分子ともなると構造式でも追いつけないほどさらに複雑な高分子になって、そのバリエーションはもうほとんど無限といってよいほどである。そしてそれらの一部には何らかの特別な役割と作用があって、遺伝子や酵素やホルモンはその最たるものである。そしてこれらの分析を現行は主としてビッグデータ解析で行っているということは、アナログ列に蓋然法則を見出そうとしている行為に当たる。

本日は見なかったが作曲とか執筆とかも、細胞分裂や高分子合成や絵画制作と同様に真っ白に多くを刻んで段階的に多機能化していく行為である。こう見ていくと我々は、数学や物理や経済学の習得のせいであたかも「数字に置き換えて四則演算を施すのが学問であり最上の道だ」と思い込んでいるところ、実はデジタル数字に乗るのはむしろ例外的であって現実のほとんどはアナログ的であることが分かる。

## 20、笑い

笑い、極めて特徴的な心象作用であり脳の働きである。人はどのようなときに笑うのであろうか。笑いと言っても実は種類が色々ある。

ダジャレとか言い違いに基づく笑いとかは、いわば言葉の遊びの笑いである。あだ名とかパロディーとかはもっと本質をとらえた笑いである。馬鹿のふりとか非常識な格好は、ビジュアルな笑いである。そして矛盾とかひねり、これらは結構高度な論理の笑いである。さらに下ネタ、品はないがなぜか笑える。ブラックユーモアというジャンルもある。ウィキペディアで「落ち」や「笑い」を検索すると、さらにいろいろな分類が出てくる。

笑いの誘起に向けて一番重要な要素はおそらく、そこに何か緊張を取るような要因があることである。緊張が取れることはすなわち安全に、そして自己保存本能につながる。特に劣等感が優越感に置き換わるような笑いにおいて、それは顕著である。典型的なのが「バカ殿もの」である。例えば志村けんさんは存在がそもそもバカ殿だ。偉い人が実は自分より偉くないと分かると、人は緊張が取れ勝つ優越感に浸って笑う。

有名な落語に「目黒のサンマ」がある。目黒で庶民が手作りのサンマを食べた殿様は従来のお毒見などを経た冷えたサンマよりもよほどうまいのに感動して、「サンマは（内陸の）目黒産に限る」とのたまわったという笑い話である。もちろん殿様は身分としては偉いが、その偉い人が常識でははるかに下にいる、この安心感と優越感が笑いを取るわけだ。

さてここで注目してほしいのだが、殿様はもし自説の正当性を主張したければもう何度か目黒にお成りになれば良いのだ。そうすれば再度同じ経験をして、自説にますます自信を持つであろう。これは一種の実験行為であり、つまりこの殿様の証明手続きは科学的である。これはいわゆる科学的成果の中にも、実はこういった笑えば良いような嘘が結構あることを象徴している。

もう一つ顕著なパターンが、話の流れをすり替えるものだ。ダジャレや言い間違い、例えば「グルメタウン」を「メルトダウン」と読んでしまうような場合の笑いはこれに入る。落語で有名な「饅頭が怖い」もここに分類される。この話では常識的に饅頭が怖いはずがないのに、だまされた結果山ほどの饅頭をおごられる羽目になる。とんまのせいで、いつの間にか役者が主客逆転している。「時そば」も同様に、論理を我田引水に持っていかれている。

似勢物語（にせものがたり）という古典があつて伊勢物語のパロディーであるが、ここでは業平の恋の歌がひねられて「金を返せ」の歌になっていて笑いを取っている。言ってみれば、夢から現実に引き戻されたちぐはぐ感である。元来は笑い話ではないが旧約聖書で、ダビデ王がズルをしたときに預言者ナタンが「こういう奴がいますが王様

はどうしますか」とダビデに問う。するとダビデ王は思わず本心から、「そんな奴は死刑にしまえ」と叫ぶ。そこでナタンは「あなたこそがその人です」というが、私はこの段でいつも笑ってしまう。こういったブーメラン効果や「平和を守るために攻撃する」のような矛盾、これらもすり替えものも読み方によっては笑える。

このすり替えものも、緊張を取るあるいは立場を逆転させて相手を見下すという意味では最初のパターンと共通である。両者をまとめると、①何らかの逆転がある、②聞いている方は安心して緊張が取れる、③知恵が介在していて感心する、の3要素が重要なようである。だから知恵があまり感じられないダジャレは、笑いの中では低いものとされている。

ところでこうまとめても、笑いの解明はまだ道半ばである。第一に笑いはいろいろ時間をかけて熟慮するのではなく、むしろ反射的に瞬間にでる。それに笑いを取る方も、特にお笑い芸人など瞬間に笑いを返してくる。なぜ知恵を要する行為が、こう瞬間にできてしまうのだろうか。そもそも笑いは論理であろうかそれとも感情であろうか。目黒のサンマを例にすれば、うまいまずいは感情であるがそれ以外は全て論理推移になっている。つまり笑える部分はむしろ論理である。

「時そば」や「饅頭怖い」のようにいつの間にか論理が横取りされているとか、「目黒のサンマ」のように論理が空振りしておよそ非常識になっているとか、笑いの本質である。ブーメランのように自分にヒットする場合も半矛盾のような場合も、いずれもその笑いの主要部分は意外なことに論理である。しかし論理とは普通は定理の証明のように正しい考えを重ねたものであるはずのところ、どうして総合すると非常識になるのか。どうして論理が瞬間に出るのか。そして論理と常識が異なったときに、どうして論理の方が優先されないのか。常識など所詮は場合によって異なる、不安定なものではないのか。

確か学校等で論理教育を受けていると、論理は無謬でかつ最上であるかのごとくに思い込んでしまう。しかし論理とはそもそも対象の一面しか見ておらず、しかも推移するごとにその見ている面が転じていくものだ。だから論理を3回も重ねるとトンデモになる方が、むしろ普通なのだ。そして経験から一般に、トンデモ論理より常識の方がずっと当てになる。このずれにこそ笑いが介在できるのだ。人々は日常に飽きて非日常を求めているところに非常識な非日常が提示されるので、そこが笑えるのだ。

ではなぜ瞬間に笑えて瞬間に返せるのか。瞬間に笑えるのはおそらく、笑う人は論理の側でなく常識の側に立っているからだろう。常識と言明との齟齬だったら、それを瞬



間的に見出すのに特別な才能はいらない。ではなぜすぐ返せるのか。これはできる人とできない人がいるようで、一種の才能のようだ。ただ出川哲朗とか上沼恵美子とかが笑いの達人だがだからと言って、別に学生時代に神童だったわけではない。才能の種類が違うのだ。

先日もガス器具の修理の兄ちゃんが私の家に来たが、結構な男前だったので嫁様が「ガス会社って顔で採用しているのかしら」と言ったら直ちに、「この家にきれいな奥さんがいるから見てこい」と言われたのですよと切り返された。こういうひらめきの才能はやはり論理が絡むものの、学校の成績や数学の証明能力とは関係がない。

笑いは明らかに勉強とは別の才能だ。私も笑い力はない方なので良く分からないが、彼らお笑い芸人はおそらく頭の中がそういったお笑い中心な構成でできているのだろう。単に論駁(ろんぱく)するのでなく相手にスパッとデッドボールさせて命中して返す、この技は明らかに「言語は不器用だ」という限界を凌駕していてほとんど芸術と言って良い。脳空間の言葉で言えば、「ここにポイントがあったら面白い」という現状は空白なポイントを目ざとく見いだせる能力という感じだろうか。

## 21、トンデモ先生

最近「しくじり先生」というテレビ番組が結構な視聴率を取っている。若気の至り等から芸能界を干されるとか借金生活に陥った有名人に反面教師として授業をしてもらうという、タメになる企画だ。今までも森永卓郎とかホリエモンとか内山信二とか見栄晴とかが先生になって、恥ずかしいというか痛い過去を語っていた。

ところで世の中にはとても偉い先生が生涯の研究の成果であると称して、常識的には結構トンデモな学説を大真面目に語ることがある。3人ほど挙げてみよう。いずれも文化勲章や文化功労者クラスの先生である。

・大野晋先生、日本語学、日本語タミール語起源説。

タミール語は南インドから北インドで使われているドラビダ語の支語で、ドラビダ語自身はサンスクリット語起源であるために広い意味ではインドヨーロッパ語族のすごくマイナーな支語ということになる。しかも語られている地域は、はるか遠方の南インドである。大野先生の学問手法は比較言語学で単語や文法を比較して類似非類似を論じるものだが、これを一生やった集大成が「日本語の起源はタミール語だ」ということだそうだ。もちろん深遠な学究の成果であろうが、常識的には考えにくい。しかもこの

説の通りなら日本語は英語と遠い親戚ということになってしまう。そしてなんでわざわざ南インドなのだろうか。そうだとしたらどういう経路で日本に来たのだろうか。

・白川静先生、古代中国文献学、孔子私生児説。

白川先生は古代中国文学が専門で、甲骨文字から諸氏百家まで広い分野をカバーしている。特に漢字の象形論に特徴があって、この解釈のユニークさはマンガの「あやかしあやし」の主題にもなった。その先生が生涯の学究の集大成として、「孔子は私生児だった」と主張したのである。もちろん論語に「私生児です」と書いてあるわけではなくて、多くの状況証拠からこの結論に至ったものである。これも常識的には考えにくい。孔子が親の愛を渴望していたとか心に何かわだかまりがあったなどということとは、論語からはおよそ感じられない。むしろ人生を楽しんだ好々爺のイメージである。

・江上波夫先生、発掘考古学、日本人騎馬民族起源説。

江上先生は主としてアジア各地の主要な遺跡を発掘して回り、日本考古学の父と言われている。発掘が北アジアに偏っていたということはないのだが、武具や馬や装飾品や言葉を総合的に考慮して「日本人特に天皇家等貴族層は北方の騎馬民族が渡来したもの」と結論した。その端的な例として、「皇尊」（すめらみこと）は騎馬民族でも同じ意味を持つという。この説も常識では考えにくい。北方からも来ただろうが実際のところは中国からも南方からも来て混じったというのが形象的にも地理的にも常識で、ことさらに北方のみというのには違和感がある。それに近代の華族を見ると顔の長い弥生人型が目立つのだが、騎馬民族はむしろモンゴル人あるいは縄文人みたいな顔だろう。

この3人を見ていると、「偉い先生が熱心にやりすぎると常識からかい離して本気でトンデモを主張する」という一種の病の法則があるかに見えてくる。発想の面白さは評価するし、もしこれがお笑い芸人とかが言ったなら笑いを取れるかもしれない。先日の「笑い」の記事でも記したが笑いの重要な要素に「スパッとハマる」いわゆる「ツボにはまる」という要素が重要なのだが、これらの先生の説はツボにはまるというよりはドツボにはまっている感じだ。ちなみにドツボとは肥溜めのことである。

おそらくこういうトンデモ学説が飛び出す背景には、物理学の量子力学や相対論で「常識を疑うことが正しい学説である」との雰囲気醸成されていたということもあるだろう。また逆に、「一生かかって当たり前のことを証明しました」というのも、学問的手続きとしては必要だがなんだかつまらない一生だ。「それではどうしろというのだ」と逆に居直られそうだが、それにしてもこれらのトンデモ先生たち、究極のしくじり先生の

ように見えてくる。病が膏肓(こうこう)に入ってもはや取り出せないのだ。虫が体の手の届かない奥に入りすぎて、もはやなすべきすべがない。

こういうトンデモ説は、在野の素人歴史学者が大好きである。例えば日ユ同祖論、ユダヤの失われた10部族は日本にやってきていてその証拠に神輿はシムハット・トーラー(聖書の巻物を担ぐ祭り)にそっくりだし伊勢神宮の語源の「イセ」も「イスラエル」だなどという説だ。あるいはイエスキリストは実は処刑されずに日本の東北地方に逃げてきて墓もあるし、その地域の祭りの掛け声はヘブライ語で理解できる(ヤートーナー＝神様勝利してください)とかだ。この論だってもし上記した偉いセンセーのお言葉だったなら、無視できなかっただろう。

こういう話は非日常であるから面白いし学問的には永遠に証明されないだろうが、話の論理を微妙にねじってある点は「目黒のサンマ」や「饅頭怖い」等のむしろ落語に通じる面白さがある。そういういわば酒のネタみたいなことをとても偉い先生がまじめに説くから、話はややこしい。結局これらの先生の教訓は、「思いつめすぎると反ってとんでもないことに走るよ」という一種のしくじりに対する警告ということであろうか。

## 22、高畑不起訴に見る論理と推測と感情

先日強姦致傷容疑で逮捕・勾留されていた高畑裕太(以下敬称略)が、示談が成立したとして不起訴処分になり釈放された。この成り行きには不思議な思いをした人も多いだろう。

強盗致傷は非親告罪だから本来なら示談が成立しても立件されるのだが、弁護士は医師の診断領域である「致傷」すらなくしてしまったわけだ。そして弁護士の声明文には「合意の可能性が高い」とか「事実は無かった」とか明らかに白々しいことを平気で入れて勝利宣言した上で、裕太をさっさと融通の利く病院に入れた。母親そして淳子が即飛んで行って、その日は病院に寝泊まりして親睦を深めたという。

もちろんこう言った声明文の公表も前提に示談金の交渉をしたわけだから、金額は公表されていないものの相当な額、例えば戸建て1軒買えるほどだろう。そしてこのたった2週間でこれだけの黒を白とも言い換える強引をやった「無罪引受人」とあだ名を持つ弁護士が、実にまだ弱冠32歳の「かわいい」という感じの女性弁護士だそう。日本もついに米国並みの法テク時代に入ったかとの感が強い。

本日はこの強姦とか示談とかおよそほとんど表に情報が出てこない事象を例に、人の推測や納得のプロセスがどういう構造になっているかを見ようと思う。対象とする記事は、ギャンブル依存症問題を考える会の代表の田中紀子さんという人が書いた「高畑裕太さん不起訴は妥当だったか」という記事だ:

<http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20160911-00010004-agera-soci>

田中>不起訴になって驚きました。  
これは感情です。

田中>真相を知らない部外者がコメントするには限界がある。  
これは事実です。

田中>弁護人は高畑側の話しか知り得ないはずなのに「合意だった」などと決めつけている。  
これも事実です。

田中>これはセコンドレイプであり憤りを覚える。  
前半は例えであり、後半は感情です。

田中>不起訴は裕太のためにならない。  
これは経験に基づく蓋然論理です。

田中>留置場で容疑者だった裕太自身が腕扱き弁護士を探して依頼できるとは思えない。  
これは合理的推測です。

田中>母淳子や事務所が手をまわしたのだろう。  
すぐ上の推測を根拠とした蓋然論理です。

田中>本人にとって大切なのは経歴を白にすることでなくこれからの生き方だ。  
これも経験に基づく蓋然論理です。

田中>起訴されて有罪になったほうが本人のためだった。  
これも経験に基づく蓋然論理です。

田中>裕太は「衝動を抑えきれなかった」と自白している。

これは事実です。

田中＞抑えられないほどの性衝動には治療が必要だ。  
これは医学的事実です。

田中＞有罪になれば自分の罪や性格と正面から向き合えた。  
これも経験に基づく蓋然論理です。

田中＞釈放や「限りなく無罪」は「衝動」と矛盾するし本人の為にならない。  
矛盾については確定論理、本人のため以下は蓋然論理です。

田中＞依存症の場合は一度どん底に落ちることが必要だ。  
これはほぼ医学的事実です。

田中＞今回の早々の不起訴は裕太の立ち直りのチャンスを奪っている。  
これまでの論理に基づいた1つのモチーフ的結論です。

田中＞高畑淳子さん、今が最大のターニングポイントです。  
これも結論であるとともに呼びかけです。

田中＞間違っても自分の付き人から始めて道をつけてやろうとしてはならない。  
これも結論であるとともに勧奨です。

田中＞有名人の一方的声明で被害者をますます傷つけることがある。  
これも経験に基づく蓋然論理です。

田中さんの論説とその分析については以上です。事件の隠匿性により、全体として推測や蓋然論理が多いことが特徴です。ここで蓋然論理は結果あるいは一般的傾向についての論理で根拠を経験とするもの、推測は単なる未来予想で根拠は勘でも良いものと使い分けています。推測や蓋然論理は絶対真ということはありませんので、もし田中さんに反論したいならそのどこにでも「そうは言いきれない」とか「それは単なるあなたの主観でしょう」などとかみついてひっくり返せば済むことです。場合によっては名誉棄損で逆提訴することも可能でしょう。

それにもかかわらず我々読者の多くは、この田中さんの論文に強く同意します。その理由は単に推測や蓋然論理といった表面上の形式を超えて、論調全体が極めて自



然であり平均的な人のこれまでの経験と感情に良く合致するからです。その意味で我々は田中論文を、全体のモチーフレベルでアナログ的に賛同しています。

最後に蛇足ながら、高畑淳子さんのこの一連の行動について私見を付け加えます。彼女は事件に大きく動揺し弁明会見で丁寧に答え「自らは歩けないほど憔悴していた」と伝えられた割には、実は裏でこれだけの手回しと指示を冷静に出して平気で札びらで事態を始末していたわけです。この齟齬は素朴に非常に不自然ではないでしょうか。こういった態度から浮かび上がる彼女の性格は、人を小ばかにした高慢と自己保身です。

そして息子の裕太は単に尊敬する母親の普段の態度を批判なく見習って、今回の行為に至ったのではないのでしょうか。そう見れば、彼が出所するときの言葉とは裏腹な逝った目や顔についても理解できます。「親孝行な俺が何で逮捕されるのだ」というわけです。反省し必要ならば治療を受けるべきなのは、実は母親淳子の方かもしれません。

## 23、箱物

先日に働かなければならない理由として、「最低限である衣食住が有料なこと」を挙げた。このうち特に住は「日本のように土地の高い国ではどうしても安くならずにはまた円高の恩恵も受けられずに」、むしろ「一生の買い物」とか「男の甲斐性」にならざるを得ない矛盾を指摘した。典型的な手段の目的化の愚である。

ここでなぜ矛盾かという、家とは冒頭の「最低限」の文脈に照らすならば「物置と寝床」に過ぎない。特に積極的に良いものを生んでくれる訳でもないのに、つまりありがたみが少ない割に変に割高だという意味だ。家とは体(てい)の良い缶からである。中身の肉では決してない。中身より捨てる缶の方がべらぼうに高い缶詰って、いったい何物だろう。

もちろん缶詰の缶には、中身を腐らせずに保存するという重要な役割がある。だからまるで無駄だとは言わない。スイカを食べると皮は捨てて生ごみが増えるが、皮が極めて薄い桃がすぐ傷ついて売り物として扱いが難しいことを思えば必要ではある。

だがそれにしてもほとんどガワ(壁)と仕切りのみの「家」が、数千万円とは高すぎないか。こう考えて世の中を見渡すと、その半分以上は実に中身でなくガワである。つまり一時的な防壁の役しか果たしていない物が、変に割高なのだ。家に次ぐ典型例が自

動車だ。これだってエンジンはついているものの本質はガワだ。そして国産車でも百万円以上する。

自動車がそれ以上にバカらしいのは、そのエネルギー効率だ。自動車の重量は約1トン、それに対し乗っている中身の人は100キロくらいだ。つまり車はガソリンを燃焼して排気ガスをばらまき地球を汚染しているが、そのうち実際に役立っている部分は1割に過ぎないのだ。この状況は自動車に限らず、電車も飛行機もみな同じようなものだ。

ここで仮の話だが、壁や防護壁が例えば電磁場のような重さのない非物質で作れるとしたらどうだろう。我々の世界はずいぶんと様相が違ってくるし、無駄なエネルギーや地球環境問題も一気に解決するではないか。もちろん現状はこんな技術の芽すらないのであるいは無駄な議論をしているかに見えるかもしれないが、もう少し視点を変えてみよう。

人類に次いで利口なのはチンパンジーだといわれている。チンパンジーのうち利口な個体は檻のカギを開けて自分で出たり、物差しを使ってバナナを取り寄せたりとかができる。まあそれなりの能力ではあるが人の次に位置していても所詮はこの程度で、普通のチンパンジーは洞穴に住んで正攻法で餌をとるしかないのだ。ちょっと寒いところを回ればもっと住みよいところに行ける北限のサルたちが、そんなことも理解せずに雪の中で震えている。

こういう姿を見てわれわれ人間は、「チンパンジーはバカだなあ」と思う。であるならもし仮に未来人類とか高度に発達した宇宙人が居るとして今の人類を見たら、「人類はバカだなあ」と思うことだろう。こういう視点は単にSFにすぎないだろうか。「我々人類は実はチンパンジーと同じである」として、謙虚になる視点も大切ではないだろうか。未来人類が獲得する新たな能力は「脳波を直接感受する能力」だと私は予想している。そうすれば「言った・言わない」とか「嘘だけど信じています」みたいな茶番をする我々を、彼ら未来人は鼻からバカにしていることだろう。

今から約500年前の15世紀に活躍した天才のレオナルド・ダビンチは、多くの戦闘具や土木工事機械を考案している。だが当時は電磁力も蒸気機関も知られていなかったために、いくら天才でも電話やトレーラーやインターネットや巡航ミサイルはおおよそ想起できなかった。この例えに則れば、今から数百年後には現人類程度の能力であってもガワはほとんどただで作れるようになるかもしれない。これは言ってみれば「ガワ革命」だ。

そういう時代がやってくればその時代の人類は今の我々を評して、あたかも我々が封建時代の滅私奉公や切腹をバカにしているかのようにバカにして憐れむだろう。つまり今我々凡人が今当たり前だと思っていることは実は単なる惰性であって、まったく当たり前でないのだ。人畜無害で生涯を終える一生ヒラの堅物経理部員も、今は褒められるかもしれないが次の時代は嘲笑と哀れみの対象かもしれない。

私は若いころから、常にこういった視点で事物を瞑想してきた。もちろん私程度の凡人にできることはたかが知れているが、それでもこういう視点に立つと見えてくる世界がある。そしてその「見えてくる」世界とは、日々の常識から科学技術や思想信条にまで至るのだ。そして現状の私の結論を一言で言うと、下らない家獲得騒動の解決策はダビンチやアインシュタインのような天才からではなくて、アングラ的な理解されにくい一見カオスみたいな土壌から出るだろうということだ。

そんな時代はまだ来っていないが、家や車を買うためにあくせくするバカらしさは分かってもらえたのではないか。トイレや台所はついてはいるが、所詮それは缶からなのだ。そして缶からのお餌をつるされて馬車馬のように目的も分からず走り続ける、それが現在「勤勉で親孝行」と称されている多数の無名の善良な人々である。

## 24、世界に1つだけ

中央画壇に背を向けて日本を放浪し最後は奄美で生涯を終えた田中一村、彼の生涯を描いた映画の「アダン」が本人も画家の榎木孝明主演で公開されたのはもう10年も前だ。

その映画に次のような一場面がある。一村が画材稼ぎに地元のお土産屋で店員のアルバイトをしていた時に、若者旅行者数人が客で入ってきた。彼らはふざけあっているうちに、うっかり商品の手作りの陶器を1つ割ってしまった。それに対して一村は、「あなた方は世界に1つしかない陶器を壊してしまいました。ついては弁償金として5万円頂きます」と極めてまじめに言う。だが因縁をつけられたと思った若者たちは一村をボコボコにしてしまう、という場面だ。

ここでその陶器が手作りで世界に1つしかないというのは事実だが、近所の趣味のおじさんによる小品でまあ常識的には100円程度か。だが一村の「世界から美術品を一つ永遠に失わせた」という主張も、それ自身は間違っていない。一村は来歴から

も分かるように孤高の人でこの世の常識とは無縁だったが、彼の主張も一つの理屈ではある。ではこの理屈をどう位置付けたら良いのか。

世界に一つしかないことが価値を高める作用をするという場面は、確かにある。人気番組の「なんでも鑑定団」では、「この人の作品は現在ではほとんど残っていないので貴重です」とか「大量生産品ですがおまけだったのでほとんどが捨てられてしまっている現状では貴重品です」などと評されて推定価格が上乘せされるということは良く目にする。

また経済学の祖と言われるアダム・スミスが経済学に目覚めたきっかけは、「人が生きるために必須で極めて貴重な空気がなぜただで入手できるのだろうか」という素朴な疑問だった。今回の一村の「素朴な要求」も、厳密には内容は違うが何か似ているというか通じるところがあるように見える。それでは一村は非常識でなく実は正しかったのか。

ではここで対象品が素人作りの陶器どころか、道端の石ころだったとしよう。石ころだって形状から材質まですべて同じものが厳密な意味で世界にもう1つあるかといえば、答えは否だ。つまり一種の貴重品だ。だがその意味で貴重品だからと言ってことさらに後生大事に拾ってきて神棚や床の間に飾るかと言われると、そういうことはない。つまり希少品が直ちに高価にはならないということだ。しかし「希少だが重要でない」というと、ちょっと分からなくなってくる。

世界に1つしかないものは希少品ではあるが、希少だからと言って常に直ちに貴重とか高価にはならないのだ。物を財貨と考えた場合に財貨の値段の付け方にはコストとプライスがあるが、いずれにしても一般の人がその財貨を買うためにどの程度までなら金を出す気になるかその心理で値段が決まる。空気がただなのも同じ理屈だろう。

一般になら多くの人の競争の可能性があるのでそれに打ち勝つほどに金を出さだろうが、その意味で個数が少ないということは同じものが山ほどあるよりは価値を上げるだろう。それにしても誰も欲しがらないような凡庸なものはその希少価値を上乘せしたとしても依然安いのであって、希少品が直ちに高価と論理がショートするわけではない。一呼吸ではただの貴重な空気は、これを一生吸い続けても依然としてただなのである。

それでは貴重品でなければ希少品でも粗末に扱ってよいのか、一村の「美術品が失われた」という芸術家ならではの素朴な気持ちはどう考えるのか。この喪失を金銭で

補えというのは、確かにちょっと筋が違う。だからこの若者たちはふざけながらその陶器に手を付けて壊してしまったその非礼を詫びるのが、正当な謝罪なのだ。

加えて先の路傍の石の例ではより顕著になるが、「数学的に全く同じ石」は確かに2つとないだろうが、人はそのようなものの見方をしない。「似たものは同じと一括りする」のが、人の常識的な物の見方である。このように「物理的にほぼ同等な石」だったら、世界中にごまんとあるだろう。だから常識的には路傍の石は実は希少ですらないのだ。

このちょっとしたエピソードは一村がいかに浮世離れしていたか、その程度を端的に描き出していた。その意味で一村自体は特に殿様ではないものの「目黒のサンマ」や「饅頭怖い」に通じることがあって、人によってはこれを笑い話と受け取るだろう。だがむしろ逆にこのエピソードを通して、目黒のサンマとか饅頭怖い等の古典落語の笑いのさらに奥に隠された「一片の真実」の存在にこそ気づくべきではないか。その一片の真実ゆえにこれらの落語は単なる笑いに終わらずに、古典として残ったともいえる。

人は常に非日常を求め笑いは非日常の一つであるが、非日常だからすべて笑いになるというわけでもない。一片の真実を含んだ笑いこそが真の文学的な笑いであって、敬意を表して聞くべきかもしれない。

2016. 09. 17